日本大学薬学部校友会

桜薬会会報

43

アポイトリカブト（*Acontum apoiense*）

ご　挨　拶

会長　山内　　盛

薬学部校友会平成17年度通常総会で会長再任のご指名を頂きましたこと、有り難く、気を引き締めてお引き受けいたしました。

1958年11月に発足して以来、47年間の薬学部校友会の歴史を振り返りますと山あり谷ありの困難の連続で、歴代会長が苦労されたことを考えますと、この３年間は比較的穏やかな期間であったと感謝しております。その間のご苦労に感謝し、歴代会長に総会懇親会の席上で感謝状と記念品を贈呈させて頂きました。

第６代高仲正会長の1988年に工科校友会（現理工学部校友会）から独立し、日本大学校友会傘下に加入いたしました。以来17年を経過しましたが、この３年間は日本大学校友会組織の一員として活躍が出来た期間であったと振り返っております。日本大学校友会は2001年に規約改正を行い今日を迎えました。

日本大学校友会に対しては前会長の原田先輩が監事に就任し中枢で活躍されております。私も副会長として財務委員会・箱根駅伝振興特別委員会校友会館設置準備特別委員会に参画させて頂き、薬学部校友会の意見を発言する機会を得ることが出来ました。また同僚学部校友会・都道府県支部とも多くの機会で意思の疎通を図ることが出来ました。

薬学部校友会としては「日本大学同窓・校友医療系学術講演会」、「日本赤十字社救急員養成養成講習会（学生会員）」、「入会記念学術講演会（新入学生会員）」を順次始めることが出来ました。また会報も変形５版からA4版に変更することが出来ました。これまで変形５版を採用した理由は定形郵便を利用することから生じた苦肉の思案でありましたが、経費削減（数十万円の節約）を考えメール便を採用することにしました。サイズも公文書などで主流となっているA4版に変更し、内容の充実を図った次第です。

今期（H17.4.～20.3.）は前期に引き続き渡邊和子（９期学内）、小林郁夫（10期）、小清水敏昌（12期）、高橋繁治（13期）、内倉和雄（14期学内）、本橋重康（21期学内）の６氏に副会長就任をお願いいたしました。６氏には総務・財務・事業・学内・ITの各委員会及び事務局を担当して頂きます。任期満了に伴い執行部の若返りを図るべきとも考えましたが、校友会本部との連携をこれまで以上に強くするために状況をご理解頂いている６氏に再任をお願いいたしました。校友会本部への参画は前田敏晴（６期）・渡邊和子の両氏に常任委員として、小林・小清水・本橋の３氏に委員として出席して頂くことをお願いしました。私は副会長・常任会委員・校友会館建設特別委員会委員長に任命されました。また大学対抗箱根駅伝応援特別委員会には原田貞亮（１期）・前田・井上の３氏と私が委員として出席し、校友会館特別委には小林氏に出席して頂きます。この様に日本大学校友会に対し学部校友会として、これまで以上に緊密さを増しております。

しかし問題が無い訳ではありません。校友会活動へ参加者が少ないことです。我が薬学部校友会は一部の会員・幹事・執行部のものではありません。本年３月には50期卒業生を正会員として迎え、正会員数は10,340名になりました。学生会員・特別会員を加えると11,521名になります。私は多くの校友と共に校友会活動をしたいのです。校友会活動への参加者を多くすることが今期の目標です。皆さんに参加頂ける行事・事業を実施してゆきたいと考えております。会報は年２回発行しておりますが事務局の現状・予算を考えるとこれ以上増やすことは出来ません。情報提供を充実するためには、会報を補完し、経費もあまり掛からないインターネットを利用するしか方法がありません。インターネット利用についてはパソコン所持者にしか効果がないと言われますが、これからの時代を考えますと無視せずに利用を考えることも必要ではないかと考えています。

個人情報管理には日本大学管理規定に準じ、十分な対処を実施しております。会員もお互いに迷惑をかけないよう管理をお願いします。

薬学部校友会がお互いの発展に寄与することができ、楽しい希望の持てる校友会になるよう努力をいたします。皆様のご協力を心よりお願いいたします。

目　次

ご挨拶　会長　山内　　盛…2
特集「薬剤耐性菌感染の現状」
　東邦大学医学部微生物･感染症学講座　石井　良和…3
鈴木豊史専任講師 米国核医学会誌優秀論文賞 …8
日本大学大学院薬学研究科博士前期課程
医療薬学社会人コースのご案内 …9
日本大学卒後教育講座のご案内 …9
会合予告…10
研究室だより…10
桜の木の下で…15
個人情報取り扱いについて…19
椿啓介先生を偲んで
　分子細胞生物学研究室助教授　小川　吉夫…20
会務報告…21
薬学部校友会役員名簿 …21
平成16年度決算報告・平成17年度予算案…22
会費納入報告…23

◆表紙・写真
撮 影 者：安川　憲
撮影場所：北海道大学植物園

薬剤耐性菌感染の現状

東邦大学医学部微生物・感染症学講座　石　井　良　和

はじめに

1904年、エールリッヒがアニリン色素であるトリパンレッドが睡眠病の原因微生物であるトリパノソーマ原虫に有効であることを立証したが、同年、早くもトリパンレッド耐性のトリパノソーマが発見された。同様に、1928年、フレミングがペニシリンを発見したが、その臨床応用開始前の1940年にはペニシリンを分解する酵素を産生する菌株に関する報告がNatureに掲載されている。このように、細菌は感染を制圧するために使用される抗菌薬に対して、様々な手段を使って素早く耐性を獲得している。現在臨床で問題となっている耐性菌あるいは耐性因子として、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌（MRSA）、メチシリン耐性コアグラーゼ陰性ブドウ球菌（MRCNS）、バンコマイシン耐性腸球菌（VRE）、バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌（VRSA）、ペニシリン耐性肺炎球菌（PRSP）、βラクタマーゼ非産生アンピシリン耐性インフルエンザ菌（BRNAR）、多剤耐性緑膿菌（MDRP）、多剤耐性アシネトバクター、多剤耐性セラチア、多剤耐性結核菌、基質特異性拡張型βラクタマーゼ（ESBL）、メタロβラクタマーゼ（MBL）、プラスミド性AmpC（セファロスポリナーゼ）、プラスミド性キノロン耐性因子（Qnr）などが挙げられる。

今から約20年前、MRSAが原因の院内感染症による死亡例が報告され、大きな社会問題となった。現在は、バンコマイシンを投与することにより、MRSA感染はある程度制御できるようになっている。大腸菌、肺炎桿菌あるいはインドール陰性プロテウスなどをはじめとする腸内細菌科による感染症は、アンピシリンやセフェム系抗菌薬などグラム陰性菌の外膜を透過する抗菌薬の登場により一度はその分離頻度が減少した。一方、これ以外の腸内細菌科に属するセラチア、エンテロバクターあるいはシトロバクターのような菌種は、その染色体上に第一世代に属するセフェム系抗菌薬を分解するβ-ラクタマーゼを有しているため、これらの抗菌薬に自然耐性を有していた。したがって、アンピシリンや第一世代セフェム系薬が臨床で使用されるようになるとこれらの抗菌薬に対して自然耐性を有する本来弱毒菌と考えられていた菌種や緑膿菌などによる、免疫能の低下した患者に感染症を惹起するいわゆる院内感染が増加してきた。しかし、その後第二世代あるいは第三世代といったβ-ラクタマーゼにきわめて安定な抗菌薬が臨床で使われるようになると、これらの菌種の分離頻度も一度は減少傾向を示すようになった。しかし、大腸菌、肺炎桿菌、インドール陰性プロテウスなどは、基質特異性拡張型β-ラクタマーゼ（Extended-spectrum β-lactamase: ESBL）を産生することにより、第三世代、第四世代セフェム系薬に耐性を示すようになった。一方、これ以外の腸内細菌科に属する菌種は、染色体上に存在するβ-ラクタマーゼを大量に産生してこれに抵抗した。さらに、セラチアや緑膿菌などはメタロ-β-ラクタマーゼ（MBL）を産生することによりカルバペネム系薬を含む全てのβ-ラクタム系薬に対して耐性を示すようになった。

本稿ではこれらの耐性菌のいくつかに焦点を当て、細菌はどのようにそれらの耐性因子を獲得し、どのようにして耐性菌が拡散していったのか、また現時点においてそれらの耐性因子がどのくらい拡散しているのかに関して論じてみたい。また、MBL産生緑膿菌は多剤耐性を示すことが多いが、なぜMBLを産生する緑膿菌が多剤耐性を示すのかに関しても最新のデータも交えて概説する。

バンコマイシン耐性腸球菌（VRE）

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌（MRSA）は、黄色ブドウ球菌が産生するβ-ラクタマーゼ（酵素学者はこの酵素をPC-1と呼んでいる）に対して極めて安定な、メチシリンという抗菌薬に対して耐性を示す菌株の総称である。1970年代まで本邦において臨床材料から分離される黄色ブドウ球菌の中でMRSAの占める割合は極めて低かったが、1997年から2001年に世界的規模で実施されたサーベイランスプログラムの一つである、SENTRYのデータを見ると、本邦において臨床材料から分離される黄色ブドウ球菌にMRSAが占める割合は70%を超えている。しかし、これらMRSAには、バンコマイシンやテイコプラニンといったグリコペプチド系薬が著効を示す。最近になって、主に米国からバンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌（VRSA）が分離されて話題となったが、現時点ではその拡散は認められていない。

腸球菌の病原性は低く、ビオフェルミンなど同菌種の生菌製剤も臨床で汎用されているくらいである。しかしながら免疫不全患者に腸球菌による感染症が発症する場合があり、その治療にはグリコペプチド系薬が有効である。しかし、欧米ではバンコマイシンに対して耐性を示す腸球菌（VRE）が多く、1997年日本でも京都の病院から最初の分離報告がなされた。VRE蔓延の背景には、家畜・家禽の成長促進剤でバンコマイシンと類似の構造を有するアボパルシンが使用されたことと関連があるとの報告がある。本邦でのVERの出現にも、アボパルシンが使用されていたタイ産鶏肉などとの関連性が議論されたが、明確に関連付けられたデータは未だ公表されていない。

バンコマイシン耐性に関与する*vanC*といった遺伝子は一部の腸球菌が染色体上に保有している。すなわち、バンコマイシン耐性はバンコマイシンに自然（低度）耐性菌を示す一部の菌種固有のものであった。本稿で問題とするのは、*Enterococcus faecalis, Enterococcus faecium*あるいは

*Enterococcus avium*といった*van*Cを保有しない菌種のバンコマイシン耐性に関与する*van*Aや*van*Bといった遺伝子である。それらの起源については、色々な可能性が示唆されている。*Corynebacterium*属、*Lactococcus*属あるいは*Bacillus*属菌に由来していることを示唆するデータも示されている。腸球菌属の中で*E. faecalis*は、性フェロモンと呼ばれるプラスミド保有菌が産生する低分子ペプチドを介して、プラスミドを保有菌から非保有菌へ効率よく受け渡す菌種である。*van*Aは*Tn*1546と呼ばれるトランスポゾン（トウモロコシの遺伝子上の可動性遺伝因子として発見されたが、細菌から高等生物にまで幅広く存在することが確認された）上にバンコマイシンの耐性発現に関係する機能が異なる複数の関連遺伝子と共に存在する。そして、トランスポゾン上に存在する遺伝子は、プラスミドから別のプラスミドあるいは染色体へと自由に転移する能力を有することになる。したがって、耐性遺伝子は様々な場所へ簡単に移動することによって、その耐性菌の構築と急速拡散したと考えられている。

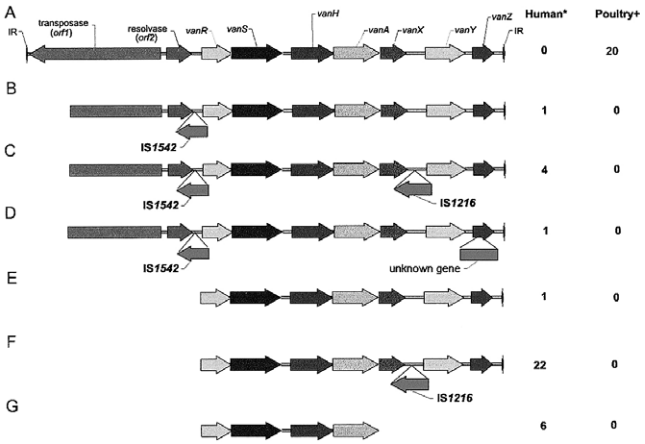


図1．Tn1546の遺伝子型によるVREの分類(Yu et al. J Clin. Microbiol. 2003. 41:2641.)

IRは逆向き繰り返し配列、Human*は人から分離された菌株数。Poultry+は鶏肉から分離された菌株数を示している。

ペニシリン耐性肺炎球菌（PRSP）

遺伝子を取り込みやすいという性質を最大限生かして耐性化したものにペニシリン耐性肺炎球菌PRSPがある。肺炎球菌は莢膜を有してマウスを殺す能力を有する強毒（S型：コロニー表面に光沢がある）菌と、莢膜を有せずマウスを殺さない弱毒菌（R型：コロニー表面に光沢がない）が存在する。このS型菌とR型菌を用いた1928年のグリフィスの実験が、肺炎球菌の遺伝子取り込み機構を解明するきっかけとなった。すなわち、S型菌の加熱死菌とR型の生菌を混合してマウスに投与したところ、大部分のマウスは死に、死んだマウスからはS型菌のみが分離されるという結果である。グリフィスはそのR型菌からS型菌が出現して来るメカニズムを解明することはできなかったが、この現象は「形質転換」と呼ばれるようになった。1994年にアベリーが非常な緻密で美しい実験系を組み、形質転換をもたらす物質がDNAであることを示した。現在までβラクタマーゼを産生する肺炎球菌は１株も報告されていず、本菌がペニシリンに対して耐性を示すメカニズムは、細胞壁合成酵素（ペニシリン結合タンパク質：PBP）の変化であることが知られている。この変化は、ペニシリンに自然耐性を示す口腔内連鎖球菌のPBPをコードする遺伝子を肺炎球菌が形質転換により取り込み、自己のPBPをコードする遺伝子と相同組み換えを起した結果、モザイク様の新たなPBPが作り出されることによりもたらされたことが明らかとなっている。幸運にも現時点では、ペニシリンに対して高度耐性を示す肺炎球菌の報告は極めて少なく、ペニシリン耐性といえどもペニシリン大量投与がその感染症治療に有効であるとされている。

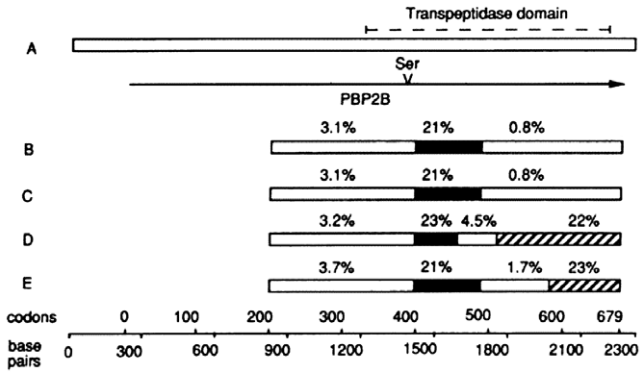


図2．ペニシリン耐性連鎖球菌のPBP2B遺伝子 (Dowson et al. Proc Natl Acad Sci USA. 1990. 87: 5858)

Aにペニシリン感性肺炎球菌R6株のPBP2B、遺伝子を示した。矢印は構造遺伝子（活性中心のセリン残基を示している）を、破線はトランスペプチダーゼドメインを、B-Eはペニシリン耐性連鎖球菌のPBP2Bをそれぞれ示した。白色で示したブロックは、ペニシリン感性連鎖球菌と高い相同性を示す部分、黒色および斜線のブロックは相違部分を示している。Bはペニシリン耐性肺炎球菌DN87/577株、Cはペニシリン耐性*S. sanguis*、DとEはペニシリン耐性*S. oralis*を示している。ブロック上部にはペニシリン感性肺炎球菌と相違する値を％で示した。

ESBL産生腸内細菌科

β-ラクタマーゼはこれまでに数多くの分類法が提唱されてきたが、最も汎用されているのはAmblerが提唱したA、B、C、Dの４つのクラスに分類する方法である（**表１**）。この分類は基質特異性によるものではなく、保存されているアミノ酸のモチーフによるものである。このうち、A、C、Dはその活性中心にセリン残基を有することからセリンペプチダーゼと呼ばれている。ESBLはAおよびDに属する酵素から派生している。ESBLの基となる酵素は、第３世代および第４世代に属するセフェム系薬を分解しない酵素で、その分解能力を遺伝子変異の結果、獲得した酵素をESBLと呼んでいる。その遺伝子は、プラスミドと呼ばれる染色体外に存在する遺伝因子よってコードされている。そして、そのプラスミドは伝達性（プラスミドを保有している菌株から保有しない菌株に移ること）を有することが多い。ESBL産生菌に関して、本邦および諸外国における分離頻度を比較すると本邦において低い傾向が認められ、さらに欧米と本邦におけるESBLではその種類が異なっている。欧米では、TEM-型あるいはSHV-型といった古典的なクラスAに属するβ-ラクタマーゼが変異したタイプが主

流である。これらの酵素の重要なアミノ酸残基に１箇所変異が存在すればESBLになる可能性がある（**図３**）。本邦のESBLは、これらの酵素とは異なり、CTX-M-型あるいはToho-型と呼ばれているタイプである。しかし、欧米と日本で検出されるESBLの型が異なる原因は分かっていない。

最近までCTX-M-型に属するβ-ラクタマーゼの起源となる酵素は不明のままであった。しかし、フランスのグループがCTX-M-型酵素の起源と思われる酵素を産生する菌種は、環境中に生息する腸内細菌科のひとつである*Kluyvera*属であることを明らかにした。*Kluyvera*属の中には、CTX-M-型酵素の内の一つと99%の相同性を有する酵素をコードする遺伝子を染色体上に保有する菌種が存在する。しかし、この菌種は第三世代セフェム系薬に対して耐性を示すわけではなく、この酵素の遺伝子が多コピープラスミド上に転移した場合に第三世代および第四世代セフェム系薬に耐性を示すようになる。その理由として、多コピープラスミド上に遺伝子が転移することによって、その酵素量が増加すると考えられている。いずれにせよ、CTX-M-型に属する酵素の遺伝子は、*Kluyvera*属の染色体からプラスミド上に転移した。私たちは、院内感染と考えられるESBL産生大腸菌、採卵鶏の糞から分離されたESBL産生大腸菌、ESBL産生腸管出血性大腸菌感染（単独症例）、さらには河川から分離したESBL産生大腸菌に関する報告をした。日本において、CTX-M-型β-ラクタマーゼは自然界にも広く分布していると考えられる。

ESBLはセフタジジムを分解することが得意な酵素とセフォタキシムを分解することが得意な酵素の２種類が存在する。薬剤感受性試験の成績を見ると、セフォタキシム分解型酵素産生株はセフタジジムが、反対にセフタジジム分解型酵素産生株はセフォタキシムによる治療が有効なように思える。しかし、米国のいくつかの施設で比較試験を試みたところ治療に失敗するケースが多く、薬剤感受性試験成績で感性株と判定されても治療薬として選択しないことが推奨される。治療薬として推奨されているのは、カルバペネム系薬、セファマイシン系薬、そしてβ-ラクタマーゼ阻害薬との配合剤である。但し、日本で多く見られるCTX-M-型をスルバクタムは阻害することができないので、配合剤の種類によっては治療効果が期待できない。

私が研究対象としている酵素はCTX-M-型酵素である。私のグループは、臨床で分離された菌株から耐性因子の特定、生化学的および酵素学的検討からの酵素学的特長の位置づけ、さらにX-線結晶解析による酵素の３次元構造の決定などを行っている。すなわち、CTX-M-型酵素を様々な面から解析し、反応機構を総合的に理解しようと考えている。1940年に初めてβ-ラクタマーゼが発見されて以来65年が経過するが、未だに反応の詳細は不明のままである。私は、酵素の反応機構を詳細に解明することができれば、今までの常識にとらわれない全く新しい阻害剤をデザインすることができると考えている。さらに、β-ラクタマーゼはβ-ラクタム系薬の作用点である、PBPをその起源とすることが知られている。β-ラクタマーゼを正しく理解することはPBPを理解することにもつながり、その意義は決して小さいものではないと信じている。しかし、残念ながら本邦でこの分野を研究対象としている大学は少ない。日本の多くの製薬企業が抗菌薬の開発から撤退して以来、企業の研究者もβ-ラクタマーゼを研究対象としなくなった。海外では、未だに多くの研究者が精力的に研究をしているのと対照的であり、極めて残念なことである。

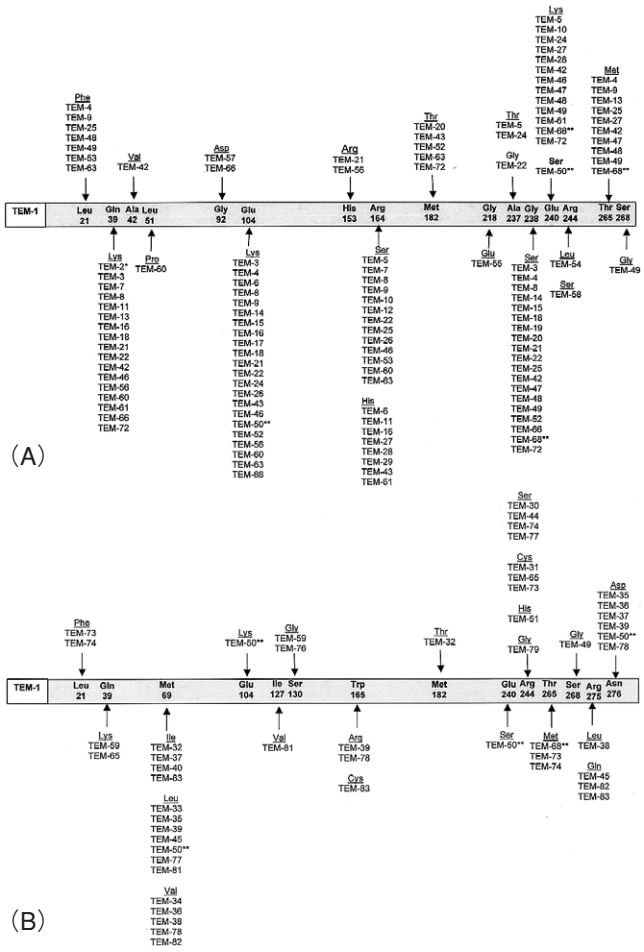


図3．TEM-型（A）およびSHV-型（B）がESBLとなるために必要な変異一覧

(Bradford. Clin Microbiol Rev. 2001, 14: 933) 両酵素ともESBLへ変異するためには、ホットスポットと呼ばれる変異が起こりやすい箇所が存在する。それはβ-ラクタマーゼの活性に必須であるアミノ酸残基ではなくその周辺に位置する残基である。

表1　腸内細菌科に属する菌種が産生するβラクタマーゼ

Ambler	Bush	Enzyme	Substrate	Organism(s)	Location
Serine-					
A	2b	Restriction-spectrum	Penicillins	*K. pneumoniae* other genera	Chromosome Plasmid
A	2be	Extended-spectrum	Expanded-spect. β-lactams	Enterobacteria-ceae	Plasmid
A	2f	Carbapenamase	Carbapenems aztreonam	*Enterobacter* spp *S. marcescens*	Chromosome
A	2e	Cefroximase	Cephalosporins	*Proteus* spp *C. koseri*	Chromosome
C	1	Cephalospirinase	Expanded-spect. β-lactams cephamycins	*K. pneumoniae* other genera	Plasmid
C	1	Cephalospirinase	Expanded-spect. β-lactams	Enterobacteria-ceae	Chromosome
Metallo-					
B	3	Carbapenemase	most β-lactams	*K. pneumoniae* *S. marcescens*	Plasmid

表１．Toho-1の三次元構造 (Ibuka *et al.* J Mol. Biol 1999. 285, 2079)

私共のグループが世界で最初に報告したESBLの構造　TEM-1の構造と比較すると2酵素間に構造上の差はほとんど認められなかった。

多剤耐性緑膿菌（MDRP）

MBLはクラスBに属する酵素で、その活性中心に亜鉛が必須ないわゆるメタロプロテアーゼである。すなわち、MBLから亜鉛を取り去ってしまえばその酵素は、活性を失ってしまう。しかし、亜鉛を取り去ることのできるキレート剤は人体にも有害で、現時点までこの種の酵素阻害剤は臨床応用されていない。当初、本酵素は特定の菌種が染色体上にコードする、すなわちカルバペネム系抗菌薬に対して自然耐性を示す菌種のみが保有する酵素であると考えられていた。緑膿菌が産生するプラスミドによってコードされるMBLに関する最初の報告は本邦からなされておりその数も多い。さらに、マスコミが報道した院内感染事例を見ると、「MBL産生緑膿菌が多い」という印象を誰でも持ってしまう。私たちが2002年に実施した、日本の60施設が参加した耐性菌サーベイランスのデータを見ると、MBL産生緑膿菌は、2%未満と想像したより分離頻度は低かった。北米大陸からMBL産生菌は、2002年まで報告されていなかったが、最近では徐々にその報告数が増加しており、MBL産生緑膿菌の問題が世界中に拡散している。したがって、分離頻度は低くてもMBL産生緑膿菌に対する対策の確立は必要であろう。

このMBLをコードする遺伝子は、複数の耐性遺伝子を効率よく取り込むことができる、インテグロンと呼ばれている遺伝子構造上に存在することが多い。インテグロンは前出のトランスポゾンと違い、この構造自体が遺伝子上を移動する能力はない。しかし、インテグロン構造にはMBLをコードする遺伝子のみならず、アミノ配糖体、第四級アンモニウム塩（塩化ベンザルコニウムや塩化ベンゼトニウム）、サルファ剤耐性をコードする遺伝子が同時に存在することがほとんどである。さらに、このインテグロン構造は、通常プラスミドのような可動性遺伝因子内に存在するため、同一の菌種間あるいは菌種を越えて伝達される。そして、伝達される度にそのインテグロン構造上に存在する耐性因子が増加する。多剤耐性緑膿菌とは、シプロフロキサシン（フルオロキノロン系薬）、アミカシン（アミノ配糖体系薬）およびイミペネム（カルバペネム系薬）の3つの異なる系統の抗菌薬に対して、耐性（一般的には Clinical and Laboratory Standards Instituteが示したブレイクポイントを用いて判定する）を示す菌株を言う。したがって、MBL遺伝子がインテグロン上に存在することを考えられるとMBL産生株は、カルバペネム系薬とアミカシンに対する耐性を既に獲得していると考えたほうが良い。インテグロン構造上にMBL遺伝子が存在することが多剤耐性緑膿菌の急速な拡散の一因になったことは明らかであり、そのことを理解することは、抗菌薬耐性菌出現予防のために提唱されている、サイクリング療法などの是非を議論する上で極めて意義深い。

日本で多剤耐性緑膿菌に対して使用できる抗菌薬はないと考えられている。しかし、欧米の報告を見ると抗結核薬であるリファンピシンや日本ではヒト用製剤は発売されていないコリスチンの有用性が示されている。これらの抗菌薬は毒性が強いことや耐性菌が出現しやすいことなどの理由から本邦ではあまり使われていない。しかし、状況によってはこれらの抗菌薬の使用も念頭においておく必要はあると考えている。

プラスミド性キノロン耐性因子（Qnr）

また、最近はプラスミド上に存在するキノロン系薬耐性因子（Qnr）が話題になっている。通常、キノロン系薬耐性因子は染色体上に存在するDNAジャイレースやトポイソメラーゼ、などに存在する、キノロン耐性決定領域（QRDR）に変異が生じて獲得されることが多い。また、キノロン系薬は細菌の排出ポンプによって容易に汲み出されることから、排出ポンプが過剰に発現している菌株はキノロン系薬耐性を示す。しかし、DNAジャイレース、トポイソメラーゼ、および排出ポンプの遺伝子はいずれもは染色体上に存在することから、この耐性は菌株を超えて伝達されることはなかった。しかし、Qnrはプラスミド上に存在し、しかもインテグロン構造上にその遺伝子が確認されている。幸運にも現在まで、Qnrは腸内細菌科からは見つかっているものの緑膿菌から見つかったとの報告はない。しかし、今後Qnrがさらに拡散することも念頭において対策を立てることが必要であると考えている。

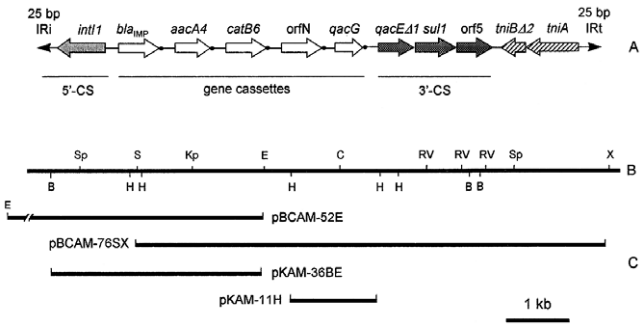


図3．In31の構造（Laraki *et al*. Antimicrob Agents Chemother 1999. 43: 890）

ORFは矢印で示した。● は遺伝子カセットの59-ベースエレメントを示した。Bには制限酵素地図、CにはDNA塩基配列決定および機能解析を実施するために用いたサブクローンを示した。B, *Bam*HI; Sp, *Sph*I; S, *Sma*I; Kp, *Kpn*I; E, *Eco*RI; H, *Hind*III; C, *ClaI;* RV, *Eco*RV; X, *Xba*I.

私は院内感染を完全に制圧することは不可能であると考えている。しかし、耐性菌の監視、抗菌薬の使用量、入院患者が有する危険因子を正確に把握すれば、院内感染をある程度制御することは可能であると考えている。しかし、そのような努力にも関わらず、不運にも院内感染が発生した場合、治療が必要になる。院内感染の原因菌は上述の如く多剤耐性を示す菌株が高く、感染症が起こるとその治療は困難を極め、悲惨な結末を辿る場合がある。したがって、その治療法、対応法の確立が急務である。

おわりに

薬剤耐性菌は、厚生労働省および農林水産省が参画し、省庁横断的なモニタリングシステムが確立されつつある。これまでは「耐性菌は病院内で作り出される」という考え方が主流であったが、今環境や畜産との関わりから耐性菌を捉えることが必要なことに気づき始めたからである。一時の抗菌薬開発の勢いが失せた今、病院内で使用される抗菌薬あるいは農業・畜産分野で使用される抗菌薬や殺虫剤

を含む農薬の使用量と耐性菌の動向を関連付けて議論し、今ある抗菌薬をより長く使うための方法を模索することが必要である。このような仕事に対して薬剤師が活躍する場は多くなると考えている。
細菌の薬剤耐性機構に関する日本の研究者は極めて少ないため、日本語でかかれた良い総説は少ない。以下、英語ではあるが良い総説を記載するので興味をお持ちの方は参考にしてください。また、私たちが公表した主な論文も記載するので興味をお持ちの方はご連絡ください。

β-ラクタマーゼに関する総説

Bradford, P. A. 2001. Extended-spectrum β-lactamases in the 21st century: characterization, epidemiology, and detection of this important resistance threat. Clin Microbiol Rev **14**: 933-51, table of contents.

Bush, K., G. A. Jacoby, and A. A. Medeiros. 1995. A functional classification scheme for β-lactamases and its correlation with molecular structure. Antimicrob Agents Chemother **39**: 1211-33.

Frere, J. M. 1995. β-lactamases and bacterial resistance to antibiotics. Mol Microbiol 16: 385-95.

Knox, J. R. 1995. Extended-spectrum and inhibitor-resistant TEM-type β-lactamases: mutations, specificity, and three-dimensional structure. Antimicrob Agents Chemother **39**: 2593-601.

Matagne, A., A. Dubus, M. Galleni, and J. M. Frere. 1999. The β-lactamase cycle: a tale of selective pressure and bacterial ingenuity. Nat Prod Rep **16**: 1-19.

Matagne, A., J. Lamotte-Brasseur, and J. M. Frere. 1998. Catalytic properties of class A β-lactamases: efficiency and diversity. Biochem J 330 (Pt 2) : 581-98.

Nordmann, P., and L. Poirel. 2002. Emerging carbapenemases in Gram-negative aerobes. Clin Microbiol Infect 8: 321-31.

Walsh, T. R., M. A. Toleman, L. Poirel, and P. Nordmann. 2005. Metallo-β-lactamases: the quiet before the storm? Clin Microbiol Rev **18**: 306-25.

バンコマイシン耐性腸球菌に関する総説

Bonten, M. J., R. Willems, and R. A. Weinstein. 2001. Vancomycin-resistant enterococci: why are they here, and where do they come from? Lancet Infect Dis **1**: 314-25.

Menichetti, F. 2005. Current and emerging serious Gram-positive infections. Clin Microbiol Infect 11 Suppl **3**: 22-8.

Patel, R. 2003. Clinical impact of vancomycin-resistant enterococci. J Antimicrob Chemother 51 Suppl **3**: iii13-21.

ペニシリン耐性肺炎球菌に関する総説

Coffey, T. J., C. G. Dowson, M. Daniels, and B. G. Spratt. 1995. Genetics and molecular biology of b-lactam-resistant pneumococci. Microb Drug Resist **1**: 29-34.

Crook, D. W., and B. G. Spratt. 1998. Multiple antibiotic resistance in *Streptococcus pneumoniae*. Br Med Bull **54**: 595-610.

Feil, E. J., and B. G. Spratt. 2001. Recombination and the population structures of bacterial pathogens. Annu Rev Microbiol **55**: 561-90.

Spratt, B. G. 1994. Resistance to antibiotics mediated by target alterations. Science **264**: 388-93.

私どものグループの主な論文

Alba, J., C. Bauvois, Y. Ishii, M. Galleni, K. Masuda, M. Ishiguro, M. Ito, J. M. Frere, and K. Yamaguchi. 2003. A detailed kinetic study of Mox-1, a plasmid-encoded class C β-lactamase. FEMS Microbiol Lett **225**: 183-8.

Alba, J., Y. Ishii, M. Galleni, J. M. Frere, M. Ito, and K. Yamaguchi. 2002. Cefcapene inactivates chromosome-encoded class C β-lactamases. J Infect Chemother **8**: 207-10.

Ibuka, A., A. Taguchi, M. Ishiguro, S. Fushinobu, Y. Ishii, S. Kamitori, K. Okuyama, K. Yamaguchi, M. Konno, and H. Matsuzawa. 1999. Crystal structure of the E166A mutant of extended-spectrum β-lactamase Toho-1 at 1.8 A resolution. J Mol Biol **285**: 2079-87.

Ibuka, A. S., Y. Ishii, M. Galleni, M. Ishiguro, K. Yamaguchi, J. M. Frere, H. Matsuzawa, and H. Sakai. 2003. Crystal structure of extended-spectrum β-lactamase Toho-1: insights into the molecular mechanism for catalytic reaction and substrate specificity expansion. Biochemistry **42**: 10634-43.

Ishii, Y., S. Kimura, J. Alba, K. Shiroto, M. Otsuka, N. Hashizume, K. Tamura, and K. Yamaguchi. 2005. Extended-spectrum β-lactamase-producing Shiga toxin gene (Stx1)-positive *Escherichia coli* O26: H11: a new concern. J Clin Microbiol **43**: 1072-5.

Ishii, Y., A. Ohno, H. Taguchi, S. Imajo, M. Ishiguro, and H. Matsuzawa. 1995. Cloning and sequence of the gene encoding a cefotaxime-hydrolyzing class A β-lactamase isolated from *Escherichia coli*. Antimicrob Agents Chemother **39**: 2269-75.

Kimura, S., J. Alba, K. Shiroto, R. Sano, Y. Niki, S. Maesaki, K. Akizawa, M. Kaku, Y. Watanuki, Y. Ishii, and K. Yamaguchi. 2005. Clonal diversity of metallo-β-lactamase-possessing *Pseudomonas aeruginosa* in geographically diverse regions of Japan. J Clin Microbiol **43**: 458-61.

Kimura, S., M. Ishiguro, Y. Ishii, J. Alba, and K. Yamaguchi. 2004. Role of a mutation at position 167 of CTX-M-19 in ceftazidime hydrolysis. Antimicrob Agents Chemother **48**: 1454-60.

Kojima, A., Y. Ishii, K. Ishihara, H. Esaki, T. Asai, C. Oda, Y. Tamura, T. Takahashi, and K. Yamaguchi. 2005. Extended-Spectrum-β-Lactamase-Producing *Escherichia coli* Strains Isolated from Farm Animals from 1999 to

2002: Report from the Japanese Veterinary Antimicrobial Resistance Monitoring Program. Antimicrob Agents Chemother 49: 3533-7.

Ma, L., J. Alba, F. Y. Chang, M. Ishiguro, K. Yamaguchi, L. K. Siu, and Y. Ishii. 2005. Novel SHV-derived extended-spectrum b-lactamase, SHV-57, that confers resistance to ceftazidime but not cefazolin. Antimicrob Agents Chemother **49**: 600-5.

Ma, L., Y. Ishii, F. Y. Chang, K. Yamaguchi, M. Ho, and L. K. Siu. 2002. CTX-M-14, a plasmid-mediated CTX-M type extended-spectrum β-lactamase isolated from *Escherichia coli*. Antimicrob Agents Chemother **46**: 1985-8.

Ma, L., Y. Ishii, M. Ishiguro, H. Matsuzawa, and K. Yamaguchi. 1998. Cloning and sequencing of the gene encoding Toho-2, a class A β-lactamase preferentially inhibited by tazobactam. Antimicrob Agents Chemother **42**: 1181-6.

Ma, L., H. Matsuo, Y. Ishii, and K. Yamaguchi. 2002. Characterization of cefotaxime-resistant *Escherichia coli* isolates from a nosocomial outbreak at three geriatric hospitals. J Infect Chemother **8**: 155-62.

Mercuri, P. S., Y. Ishii, L. Ma, G. M. Rossolini, F. Luzzaro, G. Amicosante, N. Franceschini, J. M. Frere, and M. Galleni. 2002. Clonal diversity and metallo-β-lactamase production in clinical isolates of *Stenotrophomonas maltophilia*. Microb Drug Resist **8**: 193-200.

Shimamura, T., A. Ibuka, S. Fushinobu, T. Wakagi, M. Ishiguro, Y. Ishii, and H. Matsuzawa. 2002. Acyl-intermediate structures of the extended-spectrum class A β-lactamase, Toho-1, in complex with cefotaxime, cephalothin, and benzylpenicillin. J Biol Chem **277**: 46601-8.

Takenouchi, T., Y. Ishii, and K. Yamaguchi. 2002. Properties of extended-spectrum β-lactamases constructed by site-directed mutagenesis. J Infect Chemother 8: 211-7.

著者略歴

石井 良和（いしい　よしかず）

1958年４月14日生
1981年３月　日本大学理工学部薬学科卒業
1981年５月　長崎大学医学部付属病院薬剤部
1991年４月　長崎大学歯学部口腔解剖学第二講座
1991年６月　東邦大学医学部微生物学講座
1995年３月　医学博士取得（東邦大学）
1999年５月　ベルギー国立リエージ大学理学部タンパク質工学研究センター（客員教授）
2000年５月　東邦大学医学部微生物学講座復職
2002年10月　文京学院医学技術専門学校（非常勤講師）
現　職　東邦大学医学部助手（微生物・感染症学講座）
所属学会　日本化学療法学会（評議員）
日本臨床微生物学会（編集委員）
日本薬学会、日本細菌学会、日本感染症学会
American Society for Microbiology
その他　Infection Control Doctor

鈴木豊史専任講師　米国核医学会誌優秀論文賞を受賞

薬剤学研究室　伴野　和夫

薬剤学研究室の鈴木豊史専任講師（37期；薬学部１期生）と米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）医学部Pardridge教授らの研究グループは、「ペプチド核酸アンチセンス放射性薬剤による脳腫瘍内因性遺伝子発現の生体内イメージングと脳内薬物ターゲティング技術」というテーマで、米国核医学会学術誌（Journal of Nuclear Medicine）の2004年優秀論文賞を受賞した。表彰式は６月21日に第52回米国核医学会会議（カナダ・オンタリオ州トロント）で行われ、筆頭著者である鈴木講師に記念の盾が贈られた。この賞は2004年１月から12月までに同誌に掲載されたすべての論文が対象でその中から毎年優れたものに授与される。1959年から46年の歴史を持つ同誌は、米国内だけでなく世界中の研究者に読まれており、5,700もの科学雑誌のなかでトップ５％にランクされ、核医学分野をリードしている。血液脳関門（BBB）研究の第一人者で、世界的なリーダーであるPardridge教授のもと、鈴木講師は2002年８月から１年間、日本大学海外派遣研究員として研鑽を積み、帰国後の2004年10月号に掲載された論文が今回の受賞対象となった。

アンチセンス薬剤は、がんをはじめ様々な疾病の原因となる特定の遺伝子の働きを抑え、遺伝子レベルで病気を診断・治療する画期的な薬剤としてその開発が期待されている。一方で、このような“大きな分子”の薬剤を脳に送り込むことは、BBBの存在によりこれまで困難であった。鈴木講師らは、生体がもつBBB輸送機能に着目し、この“大きな分子”の効率良い脳内デリバリーを可能にした。さらに、設計したアンチセンス薬剤の放射標識化によって、脳腫瘍内の標的となる遺伝子発現を生体内で画像化することに成功した。これらの成果は、将来、ヒトの中枢神経系の疾患の早期あるいは発症前段階からの診断や治療につながり、その応用が期待される。

日本大学大学院薬学研究科博士前期課程
医療薬学社会人コースのご案内

医療の現場で活躍されている薬剤師の知識や技術のリフレッシュ、生涯学習やキャリアアップを目的として、４～７月、９～12月の土曜日に開講しています。

開講科目

臨床薬物治療学特論Ⅰ～Ⅳ、疾患別薬理学特論Ⅰ・Ⅱ、臨床薬理学特論、医薬品情報学特論、医薬品評価学特論、社会薬学特論、薬剤疫学・薬剤経済学特論、医療薬学実務実習、医療薬学課題研究

問合せ、資料請求先

〒274-8555　千葉県船橋市習志野台７－７－１
日本大学薬学部教務課
Tel 047-465-2129　Fax 047-465-2158
URL http://www.pha.nihon-u.ac.jp
e-mail nyushi@pha.nihon-u.ac.jp

平成18年度入学試験日程

	博士前期課程	社会人科目等履修生	社会人聴講生
募集人員	若干名	各科目30名	各科目30名
選考方法	英語、面接試験	書類選考、面接試験	書類選考
試験日	平成18年２月15日（水）		随時

日本大学卒後教育講座のご案内

◎第100回記念講演会

1　**開催日**：平成17年11月19日（土）
2　**開催時間**：開式　午後３時
①午後３時10分～4時10分
②午後４時20分～５時20分
3　**会場**：日本大学カザルスホール
御茶ノ水（元主婦の友・明治大学向かい）
4　**テーマ**：①サプリメント（薬用植物）の現状と将来
―食薬区分の狭間で―
日本大学薬学部教授　安川　憲氏
②薬剤師は処方設計コンサルタント！
東京大学大学院薬学系研究科教授　澤田康文氏
5　**定員**：約300名
6　**参加費**：1,000円
7　**研修シール**：１単位
8　**終了後**：パーティー（無料）

上記の様に記念大会を開催いたします。ぜひ、お誘い合わせて「御茶ノ水」へお出掛け下さい。参加資格は特にありませんので、薬学を志望する、お嬢様やご子息、また奥様でもご参加いただけます。カザルスホールは室内楽コンサートの会場として有名な所です。

◎第101回

日時：平成18年1月12日（木）
講師：千葉大学病院感染症管理治療部長　佐藤武幸先生
演題：エイズの治療と性感染症予防教育―院内感染症対策・薬剤師との連携を含めて―

◎102回

日時：平成18年３月９日（~~土~~）木
講師：日本大学薬学部教授　松本宜明
演題：患者のための薬物動態を学ぶ（1）
―なぜ必要か、数式を用いない直感的理解―

薬物動態学は長足な進歩を遂げて、まだ進歩を続けています。しかし、学生時代に大学で薬物動態学を習わなかった先生も沢山おいでになる。今回はそんな先生方を対象に「考え方をその道のプロに教わりましょう。」と言う企画です。

◎103回

日時：平成18年５月11日（~~土~~）木
講師：日本大学薬学部教授　松本宜明
演題：患者のための薬物動態を学ぶ（2）
―どう使うか、５つの指標―

薬物動態学はチーム医療に参加する薬剤師にとって無くてはならない武器である。また、適正使用を考えるにも欠かすことは出来ない。今回、先生の長年の臨床研究に基づいたご講義をしていただく。

◎受講案内（100回以外）

会場：日本大学会館（千代田区九段南4-8-24）
最寄り駅：市ヶ谷駅JR中央線下車徒歩２分、東京メトロ有楽町線・南北線、都営新宿線下車A2出口徒歩0分
受講申込方法：当日申込のみ（予約不要）
受講開始時間：17時30分より
講演開始：18時より
聴講料：1,000円

会 合 予 告

最新情報はホームページ参照

第13回薬剤学研究室同窓会(桜実会)開催のご案内

拝啓　初秋の候、時下ますますご健勝の段、お慶び申し上げます。さて、研究室の先生の交代があり、本来なら昨年開催すべきでしたが、都合により、この度の開催となりました。10月11日（火）に予約は締め切りましたが、お電話いただければ若干名はご参加可能です。

記

日　時：平成17年10月30日（日）
受付開始11:00～、開演11:30～
場　所：ウェスティンホテル東京（恵比寿ガーデンプレイス内）
「楓の間」 東京都目黒区三田1-4-1
TEL: 03-5423-7000
会　費：12,000円
幹事会代表　岡村　信（1期）、顧問　池田秀雄（1期）
当番幹事　　高田義郎（21期）、菅野君子（22期）
連絡先：〒274－8555千葉県船橋市習志野台7-7-1
日本大学薬学部薬剤学研究室内 鈴木
E-mail: t-suzuki@pha.nihon-u.ac.jp
TEL&FAX：047-465-5877

17回桜薬祭のご案内
母校を訪ねる日

第17回桜薬祭（薬学部学園祭）が来たる11月５日（土）・６（日）の両日薬学部校舎で開催されます。

薬学部校友会では、**11月５日（土）を「校友の母校を訪ねる日」と定めて当日参加校友に昼食券（500円）を進呈しております**。当日は校友会提供の「桜薬クイズ」や学生会員の研究発表も行われておりますので、校友の皆様お誘い合わせの上ご来校ください。多数の参加をお待ちしております。

かっぱ会開催のお知らせ
（澤村良二先生傘寿お祝い会）

日　時：平成17年11月20日（日） 13時～
場　所：アルカディア市ヶ谷（私学会館）
TEL：03-3261-9921

薬理学研究室同窓会(通称 薬物同窓会)開催のお知らせ

第22回薬理学研究室同窓会（薬物同窓会）総会および懇親会を下記により開催いたしますので多数ご参加下さいますようお願いいたします。

記

日　時：平成17年11月26日（土）　午後 3時30分より
場　所：アルカディア市ヶ谷（TEL：03-3261-9921）
連絡先：薬理学研究室（TEL：047-465-3954または4027）

研 究 室 だ よ り

臨床薬剤学研究室 （３号館４階345）

松本（まつもと）　宣明（よしあき）

桜薬会会員の皆様には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

自己紹介と赴任から現在までの研究室の様子を報告させていただきます。

４月１日から青木正忠教授の後任として、臨床薬剤学研究室を担当させていただいています。3月までは昭和薬科大学の薬物動態学研究室において、教育と研究を行ってまいりました。専門は薬物動態学です。卒業後、２年間は病院においてTDMサービス、服薬指導、調剤などの薬剤師業務を行ない、患者中心の医療とその重要性を学びました。その経験をもとに患者に役立つ事は何かを常に心においています。趣味はスポーツで、あらゆるものを試みます。特にテニス、スキーが好きです。家族は妻と長男、次男の４人家族です。先日まで猫君がいたのですが、他界したため今後のペットのことは家族で協議中です。

研究室の近況をお知らせいたします。スタッフは九川文彦助教授と小山由美助手の３名です。博士前期課程２年の深澤亜季子薬剤師、卒業研究の学生３名、演習コースの学生７名が在籍しています。研究員は医師２名、歯科医師１名、病院薬剤師１名、製薬企業研究者１名です。研究生は、病院薬剤部１名、調剤薬局１名、CRO１名、製薬企業２名です。大学院生、卒論生、研究員、研究生と日々患者に役立つための研究に励んでいます。８月末には研究室旅行として、富士急ハイランド、富士の樹海散策を予定しています。富士急ハイランドでは、ドドンパとフジヤマに乗りたいと思っています。

今後の研究に関しては、薬物動態に基づく医薬品適正使用について考えています。例えばインタビューフォームのなかで薬物動態の占める割合を見ていただければと思います。患者の服用にあたりいかに適正に指導するか、医薬品開発においていかに効率良く開発できるかを日々考えています。さらにクリニカルトライアルシミュレーションなど医薬品開発に関する研究、PK (Pharmacokinetics)/PD (Pharmacodynamics) 研究、ベッドサイドにおける薬物動態学に関する研究に向け努力したいと考えています。TDMのセミナーも企画して行きたいと考えています。

赴任にあたり、このような機会を与えていただいたことに感謝するとともに、青木教授が培った研究室のさらなる発展、さらに6年制に寄与できるよう精一杯頑張りますので宜しくお願い申し上げます。　（松本　記）

病院薬学研究室 （6号館4階649）

中村（なかむら）　均（ひとし）

来年度（平成18年4月）から実施されます薬学教育6年制を念頭に、薬剤師実務教育の充実・強化を図るため本年（平成17年）4月に新設されました、病院薬学研究室の中村　均（なかむらひとし）と申します。

昭和43年に理工学部薬学科に入学し、47年の卒業です（まさに団塊の世代です）。教養の1年次が世田谷から北習志野へ移転した最初の学年です。入学2ヶ月後くらいで、大学紛争の真っ只中に入ります。入学後、大学で勉強したのは3ヶ月くらいでしょうか（1年次は、ほとんどアルバイトで、社会勉強をしていました）。2年に進級して御茶ノ水に移ってからも、駅前では火炎瓶が投げられ、よく道路が燃えていました。そんな時代でした。卒業後、家が薬局でしたので、調剤研修のために東京大学医学部附属病院薬剤部研究生となりました。約1年間の研修後、東京大学病院の職員薬剤師（文部技官）として採用され、薬剤主任などを経て、平成6年に千葉大学医学部附属病院へ副薬剤部長として転任（北田光一教授・薬剤部長）、平成11年に千葉大学から東京大学医学部附属病院へ副薬剤部長として戻り（伊賀立二教授・薬剤部長）、そして、本年4月から本学に勤務しております。

当研究室は、本年度開設のため、まだ卒業研究の学生および大学院生の配属がなく、また、現状ではスタッフも揃っていません。これから、少しずつ研究室の体制を整え、教育・指導の環境を充実させる予定です。薬剤師実務教育の強化は早急の課題ですが、現状では専任の実務教員が私を含め2名と極めて少なく、大学内および医療機関における実習指導者の確保・養成が急務です。このため、交友の諸先輩方のご協力とご支援が必須であり、よろしくお願い申し上げます。

6年制を来年に控え、病院薬剤師としての30数年の知識と経験を生かし、本学における薬剤師実務教育を充実・強化し、本学から国民が求める、医療現場で評価される、良質な薬剤師を一人でも多く育成することが病院薬学研究室の使命であり、責務であると考えています。また、私自身が医療現場の意識と乖離することなく緊張感を保つためにも、医療現場の先生方と密に連携をとっていきたいと思っています。

本年、秋から着工する8号館2階、3階の実務実習室も、学内のご理解とご協力により現場の意見がほぼ採用され、19年春の完成が待ち望まれます。この実習室は学生に使用するだけでなく、卒後薬剤師実務実習や地域の薬剤師（会）にも開放し、地域医療への貢献も予定しています。

今後、本学が乱立する薬科大学（薬学部）の中で生き残るためにも、実務実習の人的・物的な充実と強化が必須であります。今後とも、交友諸先輩方のご理解とご支援・ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。　（中村　記）

分子細胞生物学研究室 （3号館1階311）

旧生物学研究室は今年度より大学院講座になると共に分子細胞生物学研究室へと名称が変更となりました。

まず、皆様に寂しいお知らせがあります。薬学部生物学研究室初代教授として私達をご指導くださった椿啓介先生が、本年8月18日に腎不全のためご逝去されました。享年82歳でした。椿先生は日本の菌学の泰斗であられ、筑波大学名誉教授、南方熊楠賞の受賞者でした。先生は、これまで分類不能であった一群のカビ（不完全菌）の分類法としてTubaki Systemという画期的な手法を導入したことで世界的に高い評価を得てこられました。告別式には高名な生物学者が沢山お見えになり、海外の学者からもたくさんの弔電が届いていました。生物OBの皆さんの弔意の数々もありました。「巨星墜つ」の感を深くしつつ、卒業研究1期生の西村（旧姓、塩島）さんと共に先生に最後のお別れをしました。本当にかけがえのない、師の愛に満ちた椿先生。ご冥福をお祈りいたします。

さて、分子細胞生物学研究室に今年配属された卒研生は14（女子9、男子5）名です。皆優秀な方々で、教員一同大変光栄に思っております。渡邊和子先生（学部広報担当）のご指導の下、小川吉夫先生、須田篤博先生そして私と共にカビの分子系統解析、酵母のアクチン系細胞骨格、運動神経疾患（ニューロラチリズムとALS）に関する研究に日夜情熱を傾けています。国試低迷の戒厳令下であり、いかんせん取り組む期間があまりに短いのがつらいところです。演習の方の調査研究も同様ですが、こうした研究への真摯な取り組みが薬剤師としての将来に必ずプラスになるものと信じています。

もうすぐ薬学が6年制になりますが、そちらに目を奪われて残っている4年制の方々の教育を決しておろそかにしてはいけないと考えます。今社会から問われている薬剤師の存在意義に答えるためにも、4年卒と6年卒が共に手を携えて日々研鑽を積み、「患者さんのため」に皆さまに医療現場で頑張って頂かねばなりませんね。私たちも大学で頑張りますから。　（草間　記）

薬理学研究室 （3号館1階312）

桜薬会会員の皆様におかれましては、各方面でご活躍のこととお慶び申し上げます。当研究室の近況をお知らせ致します。

枝川義邦助手は平成17年1月をもって退職され、早稲田大学　先端科学･健康医療融合研究機構　生命医療工学研究所に移られました。現在、伊藤芳久教授、石毛久美子助教授、助手の荒川基記の3名で教育・研究に頑張っております。今年3月には5名（小林延敏君、柴田隼人君、白川倫君、西田佳代さん、山本誠人君）が大学院博士前期課程を修了しました。5名はそれぞれが3月に開催された薬理学会年会、薬学会年会で研究成果を発表しました。現在は、それぞれの職場で頑張っていることと思います。神経

行動薬理若手研究者の集いでは、大学院博士後期課程の阪田泰子さんも研究成果の一端を発表しております。

伊藤先生は執行部の学務担当として来年度から始まる薬学部６年制に向けて学内外で益々多忙な日々を過ごしております。石毛先生は、日本大学海外派遣研究員として８月の３週間、オーストリアを中心に滞在され、今までの研究成果を国際学会にて発表されました。博士前期課程医療薬学コース２年の石村淳君は順天堂大学医学部附属順天堂浦安病院、今井徹君は日本大学医学部附属板橋病院、小田哲朗君は国立国際医療センターでの充実した長期実務研修を終え、現在では実験に励む日々を送っております。また、卒業研究生は男性５名女性９名の計14名が新たに配属され、大学院生９名、研究生１名、教員を含めて27名の賑やかな研究室となっております。

恒例の研究室旅行は８月29日から１泊２日で草津温泉に行ってまいりました。幹事の用意周到な準備のおかげで楽しい時間を過ごすことが出来て、教員、大学院生、卒業研究生が十分に親睦を深めることができたと思います。卒業研究も既に始まっており、病院実習の無い期間や授業のない空き時間をうまく利用して各々が選んだテーマのもと、データを積み重ねながら頑張っております。残り少ない大学生活の集大成として何事にも積極的に取り組み、沢山の思い出とかけがえのない仲間を作って欲しいと願っております。

最後になりましたが、会員の皆様のご健康と益々のご活躍をお祈り申し上げます。また、11月26日（土）にアルカディア市ヶ谷にて薬物同窓会が開催されますので、薬理学研究室同窓会会員の皆様にはご出席いただきますよう重ねてご案内申し上げます。　（荒川　記）

微生物学研究室 （３号１階314）

秋も次第に深まってまいりましたが、桜薬会会員の皆様におかれましては益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。当研究室の近況をお知らせ致します。井口先生をはじめとして、板垣先生、小林先生、私（元吉）の4名で変わらず研究・教育に励んでおります。

昨年度は卒業研究生17名が無事に卒業致しました。国家試験の日程が前倒しとなり試験後に時間的なゆとりが出来たため、思い思いの過ごし方でリフレッシュをして4月からの新しい生活を迎えられたことでしょう。そして今頃は叱咤激励を受けながら社会の一員として頑張っていることと思います。

さて本年度ですが、萩原友和君が博士前期課程に進学し研究室の一員となりました。研究だけでなくバイトや趣味のバンド活動など多忙な毎日ですが、強烈な個性を発揮しつつ意欲的に取り組んでおります。また頼れる先輩として卒研生たちをリードしてくれております。その卒業研究生ですが、本年度は14名（男性５名、女性９名）が配属されました。５、６月に１ヶ月の研究成果の発表会を行いましたが、ほとんどの学生がパワーポイント等パソコンを使いこなして堂々と発表しておりました。さすがは今時の子と感心しております。

また本年度の研究室旅行ですが、日程調整に苦労致しましたが、旅行係の頑張りのお陰で無事７月２、３日に西伊豆へ行くことが出来ました。土肥金山での砂金取り体験や夜の花火、宴会など楽しい一時を過ごしながら親睦が深められたのではないかと思います。そして翌日は全員お揃いのTシャツを着ての旅行になりました。観光地ではかなり目立ち最初は少し抵抗がありましたが、慣れてしまえば返って待ち合わせなどには便利かも知れません。

後期に入り卒業研究や演習講義も本格化して参りました。その後も卒業試験、国家試験が控えており息をつく間もないかと思いますが、来春には揃って諸先輩方の仲間入りが出来ることを願っております。

末筆ではございますが、会員の皆様のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。　（元吉　記）

機能形態学研究室 （３号館１階315）

桜薬会会員の皆様におかれましては各方面で御活躍のこととお慶び申し上げます。機能形態学研究室の近況をお知らせ致します。

昨年度に配属された四年生（実験組13名、演習組4名）17名はそれぞれの進路へと巣立っていきました。社会人として病院や調剤薬局で働いている人、残念ながら国家試験に合格できず、来年に向けて勉強に励んでいる人、皆さんの今後のご活躍に期待しております。

平成17年度も本研究室は教員４名（草間教授、木澤助教授、齋藤助手、益子）に博士後期課程２年１名、博士前期課程１年５名の大学院生を加え、教育・研究活動に日夜励んでいます。さらに今年度は14名（実験組12名、演習組２名）の個性溢れる四年生が配属され、４月から実験組は卒業研究の実験が始まり、研究室が賑やかになっています。短い期間ですが、研究を大いに満喫してもらえればと思います。７月初めには軽井沢へ１泊２日で研究室旅行に行きました。第１日目に訪れた鬼押し出し園は、天明３年（1783）の浅間山大爆発によって噴き出された幅３km、距離12kmにわたる溶岩の凝結地帯に作られたテーマ・パークです。鬼押し出しの名は、火口で鬼が暴れ岩を押し出したと言う当時の人が見た噴火の印象に由来し、噴火の激しさを今に伝える景観は、世界３大奇勝の一つに数えられているそうです。みんなで溶岩の凝結地帯を散策し、改めて自然の脅威を身近で体感しました。夜はバーベキュー、誕生会、花火大会、親睦会（ただの宴会!?）と盛り沢山のイベントで大いに盛り上がりました。また第２日目はマウンテン牧場でソーセージ作りを体験し、とても楽しい研究室旅行となりました。教員、実験組、演習組を問わず、研究室旅行で親睦を深めたようで、残りの研究室生活もこの勢いで乗り切ってくれそうです。さらに今年は５人の大学院進学予定者がいるの

で、今後大いに研究室を盛り上げてくれることでしょう。

薬学教育の年限延長を来年に控え、薬学をとりまく環境も非常に厳しい状況ではありますが、校友諸兄姉におかれましては今後とも御指導、御鞭撻の程宜しくお願い致します。最後になりましたが、会員の皆様の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。（益子　記）

生化学研究室（３号館２階321）

残暑は続いておりますが、朝夕しのぎやすい季節となりました。桜薬会会員の皆様におかれましては、各方面において益々のご活躍のこととお慶び申し上げます。

当研究室の近況についてお知らせいたします。安西教授は学部長３年目の年でありますが、来年迎える薬学部６年制に向け、多忙な毎日を過ごしております。小林先生は、今年度より助教授に昇格され、教育、研究活動、そして大学の業務にと益々精を出されております。私大橋は、相変わらず教育・研究に励んでおります。大学院生は、博士前期課程を修了した樋口君が後期課程に進学し、新たに学部から前期課程に進学した３名、ならびに２年生が３名と、計７名が在籍しています。それぞれが自分の研究テーマにそって、実験・研究を励むとともに、互いに刺激しあう日々を送っております。

本年度の卒業研究生は９名（男性３名、女性６名）で、研究室旅行として７月29日に横浜を訪れました。まず最初に、キリンビアビレッジでビール工場を見学。ビール製造の工程やビールのおいしい注ぎ方を学んだ後、麦汁とビールを試飲。造りたてのビールはおいしかったです。次に、八景島シーパラダイスで水族館を観賞。そして、海の動物たちのショーでイルカ・アシカの楽しいパフォーマンスショーを楽しんでまいりました。最後は、中華街で中華料理を堪能、中でも杏仁豆腐が好評でした。かなり暑い日でしたが、みな楽しく学生との親睦を深めてまいりました。

これから後期に入り、卒業研究や国家試験に向け、奮闘の日々を送ることでしょう。そのような中でも、最後の大学生活を、研究室で過ごす期間をよき思い出になるよう過ごしてもらいたいと願っております。そして、来年の春には全員が無事卒業し、国家試験に合格して、社会にでることを祈るばかりです。

末筆となりましたが、皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。（大橋　記）

衛生化学研究室（３号館２階324）

桜薬会会員の皆様には益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

衛生化学研究室の近況についてお知らせいたします。平成17年度の卒業研究生は14名（内女子９名、男子５名）です。以前に比べ卒業研究の時間が短くなりましたが、それぞれ興味ある研究課題に取り組んでおり、同時に来る国家試験の準備についても頑張るという、４年間の学生生活の中で一番忙しい日々を送っています。大学院生は、博士前期課程（修士）に新たに4名（天野佳世子さん、井出康昭君、篠崎真紀子さん、名塚典昭君）が加わり、修士2年の石井範正君、山本美智子さん、そして博士後期課程2年の林充昭君、同じく３年の和田平君の８名が教員（手塚、榛葉、渡邊、立川）と共に研究を進めています。本年３月には渡部雄一君と青柳利紀君がそれぞれ修士課程と博士課程を修了し、社会へ巣立ちました。

研究室行事として９月のはじめに、清里高原へ出かけ、ソフトボールの練習、バーベキュー、無くてはならないコンパ、そしてパラグライダーやパターゴルフなどにも挑戦し、大いに楽しみ、懇親を深めました。

４年生の主な進路については、就職および進学でありますが、就職は順調に推移しており、進学も現時点で2名が決まっています。６年生制への移行に伴う変動の時期ではありますが、衛生薬学を学んだことが、将来に生かされるよう希望しております。先輩諸氏のご忠告や励ましをよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、会員の皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。（立川　記）

環境衛生学研究室（３号館２階325）

桜薬会会員の皆様におかれましては、各方面において益々ご活躍のこととお喜び申し上げます。

当研究室の近況を報告させていただきます。本年度は、修士課程前期に立石正和さん、社会人大学院に浦野　敦さんが入学いたしました。立石さんは、今年11月に開催される、シンポジウムへの参加・発表に向けて、研究に励んでおります。浦野さんも、業務と研究を両立する為、忙しい日々を過ごしています。

卒業研究生は９名（男性２名、女性７名）が配属されました。皆、限られた卒業研究期間の中で時間を有効に使い研究に、また、卒業試験そして、国家試験合格という目標に向かい、勉学に勤しんでいます。

８月には、１泊２日で那須方面への卒業研究旅行が行われました。卒業研究生の企画によるこの旅行は、大変楽しいものになりました。

卒業研究生が配属されてから、新しい風が吹き研究室全体の雰囲気もより活気溢れるものになりました。これから、

皆が卒業論文を無事提出し、卒業試験の合格、そして、国家試験合格となることを願っています。

本薬学部は、６年制へ移り変わる時期を迎え、当研究室スタッフ一同気持ちを新たに、研究・教育に励んで行きます。今後とも会員皆様におかれましては、ご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

最後となりましたが、桜薬会会員の皆様のご健康と益々のご活躍を祈念いたします。（溝井　記）

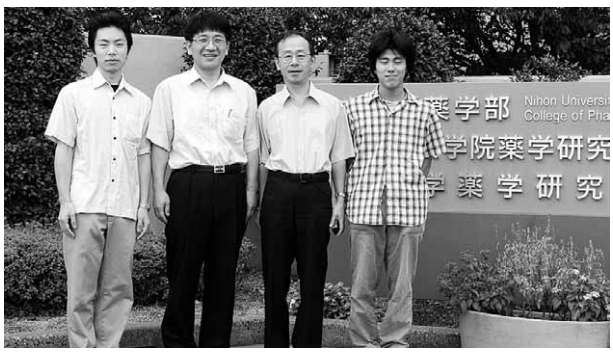
セルフメディケーション研究室（５号館２階525号）

研究室が発足して１年が過ぎましたが、スタッフの充足が懸案事項です。卒業研究生は、男子２名が配属され、就職も決まり最後の大学生活をより良いものにするために日夜励んでいます。昨年10月１日より研究員として頑張ってこられた韓国FDAの金　恵洙博士は、一年間の研究を「医薬品と生薬・食品の相互作用に関する研究」としてまとめ帰国されました。

私は、昨年度から日本薬剤師会の「薬剤師業務に関する特別委員会」臨時委員をお引き受けし、５回の委員会に参加し薬剤師の仕事と会の重要性を痛感しています。厚労省の検討委員会と本委員会の検討状況が、日本薬剤師会雑誌の本年５月号に掲載されています。

昨年９月21日から10月19日までの毎週火曜日の夕刻、日本大学生涯学習センターの秋期公開講座「薬と食品と健康管理」で５回の講演会（演者：池上文雄先生、齋藤洋先生、針ヶ谷哲也先生、内倉和雄先生と私）をコーディネートしました。この続編と致しまして春期公開講座「漢方薬とはなにか」を６月16日から７月14日までの毎週木曜日の夕刻に５回の講演会（演者：針ヶ谷哲也先生３回、私２回）で行い、定員を超えてしまい残念にもお断りをしなくてはならないほど盛会でした。また、座間市の人間セミナーにおきましては、「現代人の健康と栄養補助食品について～今、サプリメントの必要性を考える～」を２月15、22日、３月１日の３週にわたって講演を行いましたが、このセミナーも定員を超えたそうです。この様な経験を通して、市民の健康への関心の高さに薬剤師として、地域医療を充実させなければならないと、その責任の大きさを実感しています。

11月には薬学部卒後教育の100回記念講演会で、「サプリメント（薬用植物）の現状と将来―食薬区分の狭間で―」を行うこととなりました。健康への意識が高いのですが、その情報は極めて脆弱です。特に厚労省から出されている食薬区分は、不透明で誰のために作られているのか疑わしいものです。今後は、これらについて問題提起をしていく所存です。



末筆ながら、卒業生の皆様のご健勝をお祈り申し上げますと共に、ご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。（安川　記）

薬事管理学研究室（５号館３階535）

昨年に引き続き記録的な暑さが続いた夏もやっと終わり、ようやく過ごしやすい季節となりました。桜薬会会員の皆様におかれましてはご健勝にてお過ごしのこととお喜び申し上げます。平成17年度の薬事管理学研究室は、教員３名（白神教授、亀井専任講師、濃沼）、大学院博士後期課程５名（社会人）、大学院博士前期課程11名（うち社会人６名）、卒業研究生10名（男子１名・女子９名）、研究員１名、研究生３名、昭和大学からの受入大学院生１名の総勢34名の大所帯であり、それに伴い研究テーマも薬剤経済分析、医薬分業評価、薬局機能評価など多岐に及んでいます。卒業研究生10名は、昨年に続き各自が興味を持ったテーマについて、自ら研究計画を建て調査、分析をするという方式で研究に取り組んでいます。本年度から、卒業研究の締め切り期日が早まったことから、皆夏休みも返上して頑張っております。なおこの方式により、東京ビッグサイトで開催された日本薬学会125年会において昨年度の卒研生3名（鈴木美江さん・田子けいとさん・屋代詠子さん）を筆頭演者として発表させることが出来ました。演題名は「ドラッグストアにおけるプライベートブランドの調査」、「介護支援員の痴呆高齢者介護に対する負担」、「調剤時における特定保健用食品の取り扱いについての調査研究」です。これは大学４年間の集大成としても学生自身に非常によい経験をさせる事が出来たと考えております。

また３月より半年間、亀井美和子専任講師が日本大学海外派遣研究員（中期）としてニューキャッスル大学（オーストラリア、シドニーの北170km）に出張しておりました。出張先では、客員研究員として医薬品の評価方法に関して取り組まれ、今回の留学で得られた研究成果が今後の教育や研究面に反映されることが期待されます。

平成18年度から薬学６年制がいよいよ現実のものとなります。６年制教育では約半年間の実務実習が義務化され、現場で実務に携わっております諸先輩方には今後も多くのお力添えを頂くことになろうかと思われますが、ご指導ご鞭撻の程宜しくお願い致します。末筆となりましたが、桜薬会会員の皆様のご健康と益々のご活躍をお祈り申し上げます。（濃沼　記）

健康・スポーツ科学研究室（６号館１階616）

薬草園の木立から聞こえていた元気な蝉の声も優しい虫の音に変わり、すっかり秋の気配を感じる今日この頃となりました。桜薬会会員の皆様におかれましては益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。

健康・スポーツ科学研究室の近況についてお知らせいたします。研究室は昨年より相変わらず、松原助教授と私、西川の２名で教育と研究にフル回転しております。

前期６月19日に行われました高校生を対象としたオープンキャンパスでは、当研究室の体内脂肪計を利用して見学者の体脂肪率の測定を行いました。測定結果は単に体重や

体脂肪率だけではなく家庭ではなかなか測定できない除脂肪体重（LBM：組織の重量）や体水分量も測定できるということもあり、高校生からご父兄まで幅広い年齢層の方々に興味を持って測定を行って頂きました。昨年よりも１ヵ月以上早いオープンキャンパスの開催日にも関わらず、多数の方々にご来室をいただき、健康づくりを目指した日常生活でのストレッチングや年齢に応じた運動強度の設定及び、正しい歩行の方法などの説明に対して熱心に耳を傾けて頂き、改めて健康志向の強さを感じました。健康という観点から当研究室の社会で果す役割りは大きく、これから一層勉学に励んで健康づくりの施策を講じて参りたいと身が引き締まる思いです。

まもなく始まります後期授業の準備と秋の学会シーズンの到来で、現在多忙な日々を過ごしておりますが、これからも研究室員は教育と研究の充実を目標に鋭意努力をして参りますので、どうぞ同窓生皆様のご指導とご協力を賜ります様宜しくお願い致します。

最後になりましたが、会員皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。　（西川　記）

臨床医学研究室

（６号館４階645）

残暑もようやく衰え、秋の夜長が感じられる今日この頃、桜薬会会員の皆様におかれましては、各方面において益々のご活躍のこととお慶び申し上げます。

当研究室の近況をお知らせ致します。昨年度卒業致しました院生３名（病院２名、企業１名）は無事に就職が決まり、卒研生も14名（進学10名、病院２名、薬局１名、研修生１名）が無事卒業することが出来ました。

本年度は院生９名（D1（社会人）：１名、M2：１名、M1：７名）、研究生３名が在籍し、卒研生は14名（男性７名、女性７名）が配属されました。臨床医学研究室（旧　臨床薬学研究室）新設当初、鈴木教授と私の２名で初めた研究室も、教員４名を加えると総勢30名の大所帯となり、日々賑やかに過ごしております。４月には卒研コンパが開催され、５月のスポーツ大会では、臨床医学研究室として参加したソフトボールで優勝を飾ることができました。さらに７月28日には一泊二日で群馬県水上温泉に卒研旅行に行き、１日目は到着後すぐに夕食兼宴会となり、その後花火大会を行いました。２日目は利根川の上流でラフティングやバーベキューを行い、有意義な２日間を過ごすことができ、教員を初め院生、卒研生共々、互いに親睦を深める事が出来たと思います。現在は３月から始めた卒業研究も本格化し、卒業論文作成にむけて一生懸命がんばっています。そして卒業試験・国家試験の勉強に励んでもらい、来春には全員そろって卒業をし、合格できることを願っています。

今年度も就職状況が厳しいものとなっております。諸先輩方のお力添えをよろしくお願い申し上げます。

末尾ではございますが、桜薬会会員の皆様の御健康とより一層のご活躍をお祈り申しあげます。　（浅見　記）

桜の木の下で

４期生（34年卒業）クラス会

平成17年５月７日（土）13：30～16：30、東京市ヶ谷アルカデアにおいて４期卒業生のクラス会を開催した。今回お招きした先生方は、在校中ご指導いただいた先生であり、兄であり、姉でもある懐かしい方ばかりである。お名前は級友とあわせて記念写真に添付してあるので、ご覧いただきたい。

＊参加者：1、先生13名　2、級友男子21名、女子19名、計40名

開宴前に、会場写真室で全員の記念撮影を行った。撮影前は、在校時と変わらず、ワイワイ、ガヤガヤであり、「三つ子の魂百まで」といったところであった。

開宴に先立ち、故人となられた級友に黙祷を捧げ、ご冥福をお祈りした。

引き続き、卒業アルバムから作成したパワーポイントによる各自の顔写真を上映し、併せて自己紹介をしていただいた。若かりし日の写真のせいか予定した上映時間を延長するほど好評であった。

閉宴後、アルカデアの別室レストランで２次会を、会館外で３次会を行い、多数の人が参加し、おおいに話をはずませた。

我々も古希前後の年齢を迎えたが、現代は「古希これまれなり」の時代ではなく、これからも生涯家族ぐるみでお付き合いできるような関係をつくっていきたいと考えている。

追伸：参加者全員に、お土産として4期生恒例となりつつある紅白のお饅頭をお土産にお持ち帰りいただいた。

（文責　笹野英雄）

青木正忠教授御退任記念祝賀会

薬学部臨床薬剤学の青木正忠教授は、昭和45年から35年勤務されました日本大学薬学部を平成17年３月31日をもって停年退官されました。先生のご功績を称えるとともに、多年にわたるご指導に対する感謝の気持ちを込めて、先生縁りの約200名の方々のご列席のもとに、平成17年５月28日、霞ヶ関東京會舘において「青木正忠教授御退任記念祝賀会」が終始なごやかな雰囲気で行われました。

祝賀会は、青木先生ご夫妻のご入場で始まり、菅野圭介様（77年度卒）の司会で進められました。まず祝賀会実行委員長である久保山昇（73年度卒）から、35年前の青木先生との出会いや、すべてに誠実に一つ一つの問題に対して真剣に取り組んでおられる、先生のお人柄などの紹介がありました。引き続き、日本大学薬学部長、安西偕二郎先生から、薬学教育がこれまでの４年制から６年制を主体とするシステムに移行することに決まった背景や薬剤師の役割がますます重要になり、医療の担い手として薬剤師がますます社会の期待に応えていく責務があること。また、青木先生が、薬学教育６年制に関するカリキュラム作成の業績が評価され，日本私立薬科大学協会の教育賞を受賞されたご功績が紹介されました。

日本大学名誉教授、澤村良二先生、前日本大学薬学部長花野学先生の丁重なご祝辞を頂きました。薬学部校友会会長、山内盛先生のご発生で乾杯が行われ、その後暫しの間、青木先生ご夫妻を囲んでなごやかな歓談が続きました。そして、新臨床薬剤学の松本宜明教授のご紹介とご挨拶がありました。

また、祝賀会からの記念品贈呈、花束贈呈があった後、青木先生より、遠方よりご参加いただいた方々に対して、ご挨拶がありました。ご挨拶の中で、青木先生は、ご来賓の方々を初めとする祝賀会に参加された方々への御礼を述べ

られると共に、大学紛争の時代から、薬学教育制度の大改革と４年制から６年制への移行という過渡期を迎えて、非常に厳しいかじ取りをされた今日までの大学生活を振り返られました。さらに、放射化学研究室、臨床薬剤学研究室と続いてきた研究室の運営を全うできたことを回顧され、その間、色々と支えていただいた方々への感謝の言葉を述べられ、先生の脳裏に数々の思い出がよぎり思わず号泣されておりました。その後、青木先生の応援団をつとめていた谷口明様(72年度卒)、網仲幸男様(76年度卒)から、先生のますますのご活躍を祈念してエールと応援歌が贈られました。

大盛況となった祝賀会は、瞬く間に２時間余を費やしてしまい、名残惜しい雰囲気の中で、先生ご夫妻は参会者の盛大な拍手に送られて退場され、祝賀会は盛会のうちに散会しました。なお、本年４月からは平成帝京大学で教鞭を取る予定です。大勢の教え子達に親しまれた青木先生と別れを惜しみながら、新天地での活躍にエールを送りたいと思います。

最後になりましたが、紙面をお借りし、臨床薬剤学研究室九川文彦、小山由美両先生に深く感謝申し上げます。

（久保山 昇　記）

６期クラス会温泉旅行

平成17年６月11日（土）今年も昨年に引き続き熱海温泉へ出掛けてきました。

今回は、「真鶴岬での昼食会」、「熱海ニューフジヤホテルにて宿泊」、６月12日（日）の「横浜中華街における中華料理を食べる会」と３部構成の企画をし、懇親を深めました。

三つの会に通して参加された方や一部に参加された方などがおり、中には卒業以来初めての方との出会いもあって、とても充実した会になりました。参加延べ人数は17名と昨年の10名と比べ多く、幹事の前田君も企画をした甲斐があったものと思います。

11日は東京駅９時15分発「快速アクティ」の二階席グリーン車のデッキ寄り一階席コーナーに陣取り、個室の感覚で気兼ねなく缶ビールを開け、真鶴まで大いに盛り上がりました。下車駅に着いてあわてておりましたが、人数が２名足りません。ホームから車窓を見ると発車ベルが鳴っているにもかかわらず２階席で話に夢中になっていましたので、扉を押さえ、窓をたたき、降りてもらいました。

真鶴岬での昼食会は今年も磯料理「うに清」で活き作りを堪能しました。店は新しくなり、海辺を見ながらの新鮮な磯料理を肴に飲むビールは格別なものでした。昨年は食後海岸に下り磯遊びをしましたが、今回は海岸への道は工事中であったことと、かなりアルコールが入っていたのでパスして一路熱海へ向かいました。

今年のニューフジヤホテルはキャンペーン中とのことで料金を安く設定されていたためか大変混雑しており、お客さんが殆どいなかった昨年とは大違いでした。

夕食までの３時間程は各自自由行動となりましたが、折角の温泉場でもあり皆で早速露天風呂に出掛け、梅雨の晴れ間の熱海の海と初島を眺めリラックス気分を味わいました。

四條君が電車の中から盛んにカラオケに行きたいと望んでいたので、同室の福田君と私の３人はホテルのカラオケルームに出掛け１時間30分ほど歌いまくりました。アルコールもかなり入っていた四條君よりムードミュージックを歌うので，２人でチークダンスを踊れと言われたのですがさすがに爺さん２人ではお断りさせていただきました。

夕食は特別に宴会会場でとることになっていたのですが、時間になっても現地で合流することになっていた１名が到着しておらず、年配の女性でもあり心配してフロントなどに確認したりしたため、少し遅れて会を始めました。

席順はくじ引きで決めたのですが、かねてより仲の良いM君とTさんがひな壇に偶然並んで座ることになりました。会を始めるに当たって覚悟を決めたのかM氏より今後の人生を２人で過ごしていくとの発表があり、皆びっくりすると同時に祝福をし、まだまだ楽しい人生があるのだと思い、食事会もその後の別室での二次会も一層和やかになり、おいしいワインも持ち込んで遅くまで話がはずみました。

12日（日）は、中華街に行く組は熱海から横浜まで出ることになり、ホームに丁度止まっていた電車に乗ったのですが、２名足りません。しかもM君が乗っているのに昨日発表のあった最愛のTさんが乗っておらず、横浜駅で落ち合えたのですが、申し訳ないことをしたと反省したしだいです。

日曜日の中華街は丁度昼食時でもあり、大変込んでいましたが、地元にいる張（旧姓黄）さんが事前に友人のいる龍鳳酒家へ予約を入れていただいていたので、当日新たに参加した４名の方とゆっくり中華料理のフルコースをいただくことが出来ました。

このときの話題も新たに加わった４名に新しいカップルの紹介で盛り上がり、また適度なアルコールを飲みながらのおいしい料理に舌鼓を打っているうちに２時間半はすぐに過ぎてしまいました。

去年、今年と旅行と食事会を中心とした会合を持ち、同級生とゆっくり会話ができたことは参加者全員満足したものと思います。来年もこの時期企画しますので時間の取れる方は是非参加されるようお誘い申しあげます。

なお、今年も11月26日に恒例のクラス会を日比谷「うすけぼー」で開くことにしています。是非ご出席下さいますよう幹事一同お待ちしています。　（執筆　松島）

昭和52年入学・56年卒業の同窓の集い（26期）

平成17年６月12日御茶ノ水ガーデンパレスにて級友113名に13名（木村由美子、小山隆、澤村良二、滝戸道夫、徳竹伯夫、中村泉美、長谷川明、牧村瑞恵、三宅宗晴、安川憲、山内盛、渡邊和子）の先生方をお迎えして、総勢126名で卒後初めての同窓会を盛大に開催しました。

大勢集めるという幹事全員の決意のもと昨年11月に昭和52年入学・56年卒業の級友にハガキにて開催予告を送りましたが、その時点で50名近くの住所不明者があり、年賀状などで級友に協力を呼びかけました。今年５月案内状を267名に送ることが出来るまでに至り、次々と連絡先が判明し、日に日に手応えを感じ得た幹事としての喜びは私共５名（郡司明彦、公山由紀夫，知久真巳、三浦啓一、木下義文）の宝物です。

校友会を代表して渡邊和子先生にご挨拶を頂き、乾杯となりましたが、皆ご馳走に手をつける時間すら惜しみ、異口同音に「変わってないな」「すぐわかったよ」などの会話の渦の中で始まり、恒例のスピーチタイムを考えていた幹事の気遣いなど全く無用。あたかも担任の指示など聞くはずのない小学生の教室の如く、所々で盛り上がり、会場を動き回り２時間半が過ぎて行きました。

６名の先生と、完全に学生に戻ってしまった85名が二次会（東方見聞録）へ流れ、熱き会話が絶えることのない３時間へと続きました。記念写真が１枚では納められないという宿題は、小生にとって国家試験以来の難関でしたが、出席者全員に２枚ずつ記念写真を、また都合により欠席にて返信してきた（次回是非会いたい）仲間たちにカラーコピーにて２枚ずつという段取りがついた時の、肩が軽くなった心地よさはまだ昨日の事のようです。

参加した全ての級友が人生の中で最も短く感じた時間（同窓の絆を確かめあえた想い出深きひととき）というご馳走を沢山味わってくれたことと確信しております。

文末になりますが、御出席頂いた先生方お一人お一人に、同窓生としての和・絆・そしてこれからの私たちの人生への勇気を教えて頂いた、今回の同窓会（卒後講習）を大切な財産とするお約束で52－56会全員を代表して御礼とさせて頂きます。

私見ですが学生時代よりも先生方の授業が素晴らしく思えました。私達が少し大人になれたということでしょうか。幹事として動いたこの一年、好きな言葉がひとつ増えました。

「また桜の木の下で乾杯」５年後に

（幹事代表　木下義文）

茨城県支部総会

平成17年６月19日（日）、茨城県立県民文化センターにおいて、第４回薬学部校友会茨城県支部総会が開催されました。全ての対象者の皆様に開催通知を差し上げましたが、参加者は21名と残念ながら小規模なものとなりました。

総会には大変お忙しい中、山内盛薬学部校友会長、小林郁夫副会長が御出席下さいました。山内先生は「総会に呼ばれる度に水戸に来やすくなる」と常磐線について触れておられました。上野から水戸まで約1時間とアクセスが便利な茨城県と今後もお付き合いいただきたいと思います。

議事では活動報告のほか、当支部の活性化のため、役員選出方法、規約の改正等について話し合われました。大変

活発に意見が出され、当支部活動に対する会員からの期待が感じられました。

総会終了後、研修会が開催されました。弁護士である小林副会長に「判例に学ぶ薬剤師の注意義務」をテーマにご講義いただきました。１時間強にわたる講義の後、参加者から活発に質問が出されました。熱心な質問と丁寧な回答の結果、質問時間が足らなくなってしまました。次回は十分に質問時間を設けたいと思います。

懇親会は同センター内グリルで行われ、山内会長、小林副会長ともに御出席下さいました。学生時代の懐かしい思い出話や会員同士の情報交換など、とても楽しい時間を過ごすことができました。本総会の開催にご協力いただきました皆様に心から感謝致します。

最後に当支部について少々説明させていただきます。当支部は薬学部校友会から承認された数少ない地区支部であり、会員対象は茨城県内に在住し、または勤務している方です。会員相互の親睦融和、情報交換、資質向上を図ることを目的に平成8年に設立され、研修会、講演会等を開催しております。

残念ながら今回出席できなかった皆様方の参加を、会員一同お待ち致しております。　（臼井正幸　記）

「八期の会」報告

平成17年６月19日（日）帝国ホテルにおいて８期生の同窓会を開催しました。２年前に卒業後40年を記念して開催したばかりでしたが、会う機会をもっと多くとの声に応えて今回の開催に至ったものです。今回の参加者は前回と同じ52名でした。

卒業以来40数年、全員それなりに貫禄十分な紳士淑女となり顔を合わせてもすぐに判らない方もありましたが、記憶が戻るにつれ懐かしさが溢れ、受付け周辺では開会前からわいわいがやがやと話に花が咲いていました。

母校で後輩の教育指導に当たってきた同期の青木正忠君も本年３月に定年となるなど第一線をはずれ悠悠自適に過ごされている方もおられましたが、まだまだ現役の薬剤師として活躍されている方も多くおられました。

地方からは遠く北海道や四国からも参加され、また新潟からは昨年10月の中越地震で被災された宮　正伊君も駆けつけ、清水夫佐子さん（欠席）ともども薬剤師の資格を活かし被災者を救援したりするなど復興に努めていると力強く挨拶されていました。

集合写真撮影後、清水邦彦君、栗原（陶山）道子さんの名コンビの司会でいよいよ開会。

この２年の間に３名の方が逝去されていることが判り、開宴前に亡くなられた方々のご冥福を祈って全員で黙祷を捧げました。

代表幹事の山崎勝弘君が挨拶の後、来賓の薬学部校友会会長 山内　盛先生より、薬学部の卒業生が１万人を超えたことや、平成18年度からは薬学教育が６年制になることにより、学校としてもその対応に追われているなど母校や薬学教育の現況、将来が紹介されました。

千葉貴司前代表幹事の乾杯の音頭で開宴ともなると、コップ片手にあちこちで握手をしたり肩を抱き合ったり、写真を撮り合ったり、また会場内にはかつての寄せ書きが貼り出され、２年前の同窓会の様子がDVDで映写されるなど雰囲気が一段と盛り上がりました。

名残は尽きませんでしたが予定の２時間はあっという間。次回は伊藤　進君を代表幹事として２～３年後に開催するということで楽しい一日を終えました。　（前田圭一　記）

個人情報の取り扱いについて　　事務局

本年４月個人情報保護法が施行されたことにより、日本大学では「個人情報保護に関するガイドライン」を定めました。薬学部校友会でも個人情報の保護に万全を期するよう努めております。

薬学部校友会では平成16年度版会員名簿を出版いたしましたが、配布先は薬学部校友に限定して居ります。すべての冊子に番号を附し、配布台帳に記載して行方を明確にしております。名簿資料は校友会・研究室および卒業期から皆様への情報提供以外には使用いたしません。皆様もお手元の校友名簿の管理には十分な配慮をお願いします。

滝戸道夫先生叙勲報告

本学名誉教授 滝戸道夫先生におかれましては、永年に亘る薬学教育および研究活動へのご功績が認められ、春の叙勲受章において瑞宝中受章の栄に浴されました。りんどう会会長原田貞亮様を中心として、滝戸先生に指導受けた生薬学研究室出身者及び生薬学研究室メンバーが発起人となり、叙勲祝賀会を７月24日（日）、新高輪プリンスホテル 国際館パミール３階「香雲」にて開催致しました。

当日は273名のご参加をいただき、広い会場もいっぱいで盛会となりました。安西偕二郎学部長から大学の近況も含めたご挨拶や福田英臣先生からは、滝戸先生との長年にわたるお付合いなど心のこもったお祝辞を頂きました。滝戸先生からは、謝辞と共に生薬や植物関連の多くの会でご活躍されている様子などを伺えることができました。

また、多くの参加者は先生が現役当時と少しもお変わりなく、お若くお元気でおられ驚いている様子でした。乾杯には薬学部校友会会長で、滝戸先生とともに生薬学研究室を支えた山内盛先生のご発声により行われた。

参加者の中には北は、北海道から78年卒の三浦雅道さんが、西は、高知県松本道明様、山口県渋谷正様とお嬢さんの志摩子様など先生を慕って多くの方々が遠方から参加してくださいました。これはひとえに先生のお人柄の賜物であると思います。

記念品贈呈には、本学一期生で最初の助手として務められた小野哲司様から記念品が滝戸先生に、また、先生を支えてこられた澄子婦人には、滝戸先生在職最後の助手を勤められた瀧本智恵様から花束が贈呈されました。

桐澤誠先生を初め多くの教職員や校友の皆様のご出席を賜り、和気あいあいとした和やかな祝賀会となりました。

滝戸道夫先生のご健康と益々のご活躍を祈念致します。

（北中　記）

椿啓介先生を偲んで

分子細胞生物学研究室
助教授　小川吉夫

薬学部開設から７年間にわたり生物学研究室を主宰されていた椿啓介先生が、去る平成17年８月18日、尿毒症のためお亡くなりになりました。享年81歳でした。

先生は、昭和23年に東京農業大学農芸化学科を卒業された後、財団法人長尾研究所を経て、昭和36年に武田薬品工業株式会社が出資する財団法人発酵研究所に移られ、副所長まで務められました。筑波大学生物科学系の設立とともに昭和51年に教授として着任、退官後、昭和63年から平成６年まで日大薬学部で生物学の教鞭をとられました。

代表的なご研究は、不完全菌類（胞子を作らないカビの仲間）の分類体系に関するもので、この研究は世界的に高く評価されおり、The Huges-Tubaki-Barron System として不完全菌類の分類の指針となっています。このような業績を背景に平成５年には、南方熊楠賞を受賞され、日本大学からも表彰を受けていらっしゃいます。また、平成10年には、英国菌学会よりCentenary Fellow（名誉会員）の称号を贈られています。

７月末から１週間ほどハワイで学会があり、帰国した直後に先生が腎不全で入院されているとの知らせを受けました。教え子の多くがその学会に参加していたので、先生はそのことを気に留めていて、奥様に「もう、みんなは帰って来たか？」としばしば尋ねられていたそうです。早々に病院へお見舞いに伺うと、「いつも眠っているので、多分、わからないかも知れない。」との奥様のお話でした。それでも、我々が近付くと目覚められ、学会の様子に耳を傾けられたり、持参したハワイでの学会の写真や講演要旨をご覧になったりしていました。今わの際まで研究者であり続けたのだと思います。「先生、忘年会でおいしいお酒を飲みましょう！」と言ってお別れしたのが最後になってしまいました。

ご高名な先生でしたが、「先生」と奉られるのがお嫌いで、コンパの時など、「雨男」、「スピード狂」、「せっかち」等々と、こう言っては失礼ですが、よくからっかたもので、そんな時も、勿論、お怒りになることも無く、和んだ雰囲気を楽しんでおられました。また、大変に教え子思いの先生で、先生を最後に見舞った後輩の話によれば、朦朧とした意識の中でさえ、病院の最上階にあるレストランに行こうと訪ねて来た教え子の労を何とかねぎらおうとされていたようです。

椿先生の優しさの本質は、こういった上辺だけのことだけでなく、伸び伸びと研究が出来る環境を整えて下さったこと、それぞれの身が立つように配慮して下さったことにあったと思います。私にとって、先生は引退後も精神的支柱であり、まさに、「巨星墜つ」の感があります。しかし、国際派でダンディだった先生には、「Keisuke Tubaki・Superstar逝く」と言った方がふさわしいのかも知れません。ご冥福を心からお祈りします。

会 務 報 告

総務委員会　学内委員会
財務委員会　ＩＴ委員会
事業委員会　事　務　局

平成17年度校友会総会報告

平成17年度校友会通常総会は平成17年６月25日（土）午後１時30分から薬学部512教室で会員60名が参加し、名誉会長安西偕二郎薬学部長を迎えて開催した。山内　盛会長の挨拶、安西名誉会長の挨拶の後、会則により山内会長を議長に選出した。議事に入り、第１号議案（平成16年度庶務報告、事業報告、決算報告ならびに監査報告）について審議し、可決承認された。第２号議案（平成17年度事業計画案ならびに予算案）および第３号議案役員承認については、原案どおり承認された。なお、本年度は薬学部校友会役員改選期であり、会長には引き続き山内盛氏（４期）が満場一致で選出された。引き続いて懇親会が本日をもって改修工事になる学生食堂で開催された。懇親会には、日本大学副総長小野沢元久先生をはじめ校友会本部事務局事務長呉屋正盛様、同僚学部校友会会長など12名ならびに母校教職員多数を迎えて開かれた。ご来賓を代表して副総長小野沢先生のご挨拶後、石田隆夫氏（１期）の音頭で乾杯し、開宴となった。日本大学校友会表彰規程により元薬学部校友会会長髙仲正氏（２期）に感謝状および記念品が校友会本部事務局事務長呉屋様より贈呈された。定年で退職された恩師（青木正忠先生、鈴木晃様）に山内会長より感謝状および記念品が贈呈された。さらに、薬学部校友会表彰規程により、薬学部校友会歴代会長｛初代および４代；石田隆夫氏（１期）、２代；武本信也氏（１）、３代；平栄氏（２期）、５代；髙仲正氏（２）、第６代；原田貞亮氏（１）｝に感謝状および記念品が、また、薬学部校友会奨学・研究基金へのご寄付をいただいた方（青木正忠（８期）、９期生クラス会）へ感謝状が山内会長より贈呈された。校友会の事業として本年度から開始した薬学部校友会研究奨励金による薬学部校友会研究者；須田篤博氏（42期）に対して研究奨励給付証書が山内会長から授与された。恒例の福引も行われ、次年度の再会を楽しみに散会した。

工科系校友会連絡会および支部長会報告

第23回日本大学工科系校友会連絡会および第８回日本大学工科系校友会支部長会が平成17年８月27日（土）に理工学部船橋校舎で開催された。本年度は薬学部が当番校友会ですが、６年制に向けてキャンパスの改修工事が開始されたことで理工学部船橋校舎で行いました。

連絡会（出席者34名で薬学部９名；会長、副会長（６）、薬学部校友会常任理事（３））では、各校友会の運営状況（活動状況、名簿発行などを含めて）、準会員制度発足に伴う還元金の使用方法、工科系校友会支部会への援助金の件などについて意見交換をした。

支部長会（出席者63名で、薬学部９名および薬学部校友会千葉県支部長　渋江洋介氏）では、４学部校友会の活動報告、支部会への援助金の問題、校友子女入学試験などについての報告があった。続いて各支部会の活動報告があり、各支部とも支部会総会への出席者の減少、若手会員の総会への動員、支部への支援を求めるなどの意見があった。

薬学部校友会役員名簿

（2005. 4. 1～2008. 3. 31）

薬学部校友会役員名簿

会　長　山　内　　盛（４期）
副会長　渡　邊　和　子（９期）　高　橋　繁　治（13期）
　　小　林　郁　夫（10期）　内　倉　和　雄（14期）
　　小清水　敏　昌（12期）　本　橋　重　康（21期）
監　事　小　山　　隆（１期）　長谷川　　明（５期）
　　斎　藤　好　廣（18期）

卒業期・学内選出役員名簿

◎印　常任幹事

第１期　◎原田　貞亮、大林　　温、分林　孝夫
第２期　◎鈴木　康雄、石黒　文夫、高木　茂夫
第３期　◎中村　　健、徳竹　伯夫、中村　勝義
第４期　◎笹野　英雄、大島　芳郎、島峯　望彦
第５期　◎中西　　弘、鍋　　俊夫、大日方綾子
第６期　◎前田　敏晴、高橋　頼子、松島　章浩
第７期　◎藤原　充雄、小山　征治、田中　孝治
第８期　◎青木　正忠、木村　征子、前田　圭一
第９期　◎小久保光昭、長沼　邑子、吉田　哲朗
第10期　◎小林　郁夫、太田　健三、杉谷　英雄
第11期　◎鈴木　鎮世、桑畑　善信、灰原　義夫
第12期　◎小清水敏昌、野澤　克己、星　　隆志
第13期　◎高橋　繁治、玉川　欽也、松田　信行
第14期　◎岸田　邦雄、牛込　陛阜、須賀　正道
第15期　◎黒河内雅夫、伊藤　幸雄、深瀬　善弘
第16期　◎伊藤　順子、藤田　正雄、藤原　良雄
第17期　◎高木　友直、深瀬　悦子、吉野美佐子
第18期　◎　　大河内一紀、渡部　幹夫
第19期　◎坪川　博則、須藤　孝子、吉岡　晴美
第20期　◎小河壯公人、池松日出子、菊池　紀子
第21期　◎杉森万千日兒、石田　制利、吉田　善一
第22期　◎苅部　博哲、井澤　郁子、菅野　圭介
第23期　◎熊井　俊夫、岡田　　博、柴田　恭子
第24期　◎石塚　善久、謝村　錦芳、藤村　幹夫
第25期　◎梅沢　芳史、安西　玲子、栗原由紀子
第26期　◎木下　義文、小森谷友宏、梶原加恵子

第27期　◎飯塚　　進、木村　寧子、高橋　敦男
第28期　◎
第29期　◎
第30期　◎鈴木　恵裕、谷　　賢志、原口　善朗
第31期　◎原　　英行、田口　裕之、吉野　隆章
第32期　◎
第33期　◎笹本　　修、熊谷　　仁、関根　　均
第34期　◎坂本　治彦、石川　浩子、原　　浩祐
第35期　◎杉本　勝昭、石崎　智昭、坂井　義則
第36期　◎中嶋　順一、藤澤　秀樹
第37期　◎鈴木　重油、酒井　秀夫、渡邊　和裕
第38期　◎脇田　一亮、若林　　聡
第39期　◎
第40期　◎
第41期　◎轟　　耕司、宮田　成康、高梨　正成
第42期　◎堂埜　　仁、猪狩　富夫
第43期　◎
第44期　◎　　飯田名々枝、田中　雪葉
第45期　◎森木誉嗣昭、及川　直毅、富田　歩子
第46期　◎麦島　　篤、磯部　　幸、佐藤　史行
第47期　◎岩田　佳之、安倍　祐治、大平　正隆
第48期　◎八巻　　亨、藤井　真里、南里　智洋
第49期　◎石井　範正、加藤　祐子、蛭田　剛俊
第50期　◎野村沙和子、伴野　絢子、宮﨑　恵理

学　内　渡邊和子、内倉和雄、草間　貞、中村　均、
伴野和夫、立川真理子、本橋重康、三宅宗晴、
山中健三、鳥山正晴、内山武人、小山由美、
荒川基記、三浦基文、溝井睦美

会則第８条第４項による会長指名常任幹事
学内選出幹事　15名全員

空欄は未選出です。卒業期選出幹事は同期生への世話役も兼ねております。自薦・他薦を問いませんので推薦をお願いします。

薬学部校友会委員会名簿

委員会	委員長	副委員長
総務委員会	渡邊　和子（９）	杉森万千日兒（21）
財務委員会	小林　郁夫（10）	草間　　貞（15）
事業委員会	小清水敏昌（12）	伴野　和夫（19）
学内委員会	高橋　繁治（13）	立川真理子（20）
ＩＴ委員会	内倉　和雄（14）	梅沢　芳史（25）
事　務　局	本橋　重康（21）	鳥山　正晴（30）

（卒期）

日本大学及び関係諸団体委員名簿

校友会関係

日本大学校友会	副会長	山内　　盛（４）
	監　事	原田　貞亮（１）
	常任委員	前田　敏晴（６）
	常任委員	渡邊　和子（９）
	委　員	小林　郁夫（10）
	委　員	小清水敏昌（12）
	委　員	本橋　重康（21）
工科系校友会連絡会	幹　事	渡邊　和子（９）
	幹　事	小林　郁夫（10）
	幹　事	本橋　重康（21）
医療系同窓･校友連絡会	幹　事	山内　　盛（４）
	幹　事	小清水敏昌（12）
	幹　事	中村　　均（17）
全国薬科大学・薬学部同窓会連絡協議会	委　員	山内　　盛（９）
	委　員	渡邊　和子（９）
	委　員	本橋　重康（21）

（卒期）

薬学部関係（2005年度・任期１年）

薬学部校友会奨学生選考委員会	委　員	山内　　盛（４）
	委　員	内倉　和雄（14）
	委　員	本橋　重康（21）
薬学部校友会研究奨励金研究者選考委員会	委　員	山内　　盛（４）
	委　員	渡邊　和子（９）
	委　員	本橋　重康（21）

（卒期）

平成16年度決算報告

16. 4. 1～17. 3. 31

○本部還付金

科　目	還付額	振替先	差　異△
本部還付（正会員）	79,200		
年会費充当		66,000	
雑収入（寄付金扱）		13,200	0
本部還付（準会員）	3,829,000		
入会金充当（半額）		2,390,000	
年会費充当		1,094,000	
前納会費充当		345,000	0
合　計	3,908,200	3,908,200	0

○収入の部

科　目	予　算	決　算	差　異△
入会金	2,600,000	2,600,000	0
年会費	7,568,000	6,968,000	△　600,000
前納会費積立	4,968,000	4,706,000	△　262,000
当年度納入	2,600,000	2,262,000	△　338,000
利子	2,000	219	△　1,781
雑収入	400,000	456,200	56,200
前年度繰越	1,942,316	1,942,316	0
合　計	12,512,316	11,966,735	△　545,581

平成17年度予算案

17. 4. 1～18. 3. 31

○本部還付金

科　目	還付額	振替先	差　異△
本部還付（正会員）	96,000		
年会費充当		80,000	
雑収入（寄付金扱）		16,000	0
本部還付（準会員）	4,900,000		
入会金充当（半額）		2,500,000	
年会費充当		1,400,000	
前納会費充当		1,000,000	0
合　計	4,996,000	4,996,000	0

○収入の部

科　目	予　算	前　年	差　異△
入会金	2,760,000	2,600,000	160,000
年会費	7,680,000	7,568,000	112,000
前納会費積立	4,800,000	4,968,000	△　168,000
当年度納入	2,880,000	2,600,000	280,000
利子	200	2,000	△　1,800
雑収入	500,000	400,000	100,000
前年度繰越	2,405,633	1,942,316	463,317
合　計	13,345,833	12,512,316	833,517

○支 出 の 部

科　目	当　年	決　算	差　異△
1 事業費	5,987,000	5,262,505	△ 724,495
1 会誌発行費	3,400,000	2,878,225	△ 521,775
印刷費	1,800,000	1,523,750	△ 276,250
編集費	100,000	74,840	△ 25,160
発送費	1,500,000	1,279,635	△ 220,365
2 活動補助費	2,025,000	1,864,580	△ 160,420
卒後教育講座	300,000	300,000	0
支部等	373,000	363,400	△ 9,600
学生会員	1,352,000	1,201,180	△ 150,820
3 HP管理費	562,000	519,700	△ 42,300
2 会議費	1,645,000	993,614	△ 651,386
1 総会費	730,000	474,498	△ 255,502
2 委員会費	130,000	85,986	△ 44,014
3 印刷費	115,000	82,530	△ 32,470
4 発送費	670,000	350,600	△ 319,400
3 事務局費	2,710,000	2,059,682	△ 650,318
1 管理費	795,000	628,127	△ 166,873
2 人件費	1,200,000	1,135,565	△ 64,435
3 旅費交通費	500,000	135,830	△ 364,170
4 通信費	215,000	160,160	△ 54,840
4 その他	1,262,000	1,245,301	△ 16,699
1 本部等分担金	820,000	832,000	12,000
2 慶弔費	442,000	413,301	△ 28,699
5 予備費	908,316		△ 908,316
6 次年度繰越金	0	2,405,633	2,405,683
合　計	12,512,316	11,966,735	△ 545,581

○支 出 の 部

科　目	当　年	前　年	差　異△
1 事業費	6,342,700	5,987,000	355,700
1 会誌発行費	3,100,000	3,400,000	△ 300,000
印刷費	1,600,000	1,800,000	△ 200,000
編集費	100,000	100,000	0
発送費	1,400,000	1,500,000	△ 100,000
2 活動補助費	2,835,700	2,025,000	810,700
卒後教育講座	500,000	300,000	200,000
支部等	523,000	373,000	150,000
学生会員	1,812,700	1,352,000	460,700
3 HP管理費	407,000	562,000	△ 155,000
2 会議費	1,228,500	1,645,000	△ 416,500
1 総会費	600,000	730,000	△ 130,000
2 委員会費	124,000	130,000	△ 6,000
3 印刷費	84,500	115,000	△ 30,500
4 発送費	420,000	670,000	△ 250,000
3 事務局費	2,660,000	2,710,000	△ 50,000
1 管理費	320,000	795,000	△ 475,000
2 人件費	1,760,000	1,200,000	560,000
3 旅費交通費	350,000	500,000	△ 150,000
4 通信費	230,000	215,000	15,000
4 その他	1,398,000	1,262,000	136,000
1 本部等分担金	830,000	820,000	10,000
2 慶弔費	568,000	442,000	126,000
5 資金調整費	1,000,000	0	1,000,000
6 予備費	716,633	908,316	△ 191,683
合　計	13,345,833	12,512,316	833,517

会費納入報告

財務委員会

会費を納入いただきました会員の方々の名簿です。ご協力ありがとうございました。
誤りがございましたらお知らせ下さい。　（平成17年３月１日～平成17年８月31日）

会費納入者

●2,000円納入者

56飯田龍男, 加賀谷進二, 笠井能子, 斎藤美智子, 宮田節子　58金子佐知子, 斉藤友美, 佐藤雅子, 山田愛子　59石川栄一, 角田律, 木村清, 高梨久美子, 矢野哲比古　60斉藤文夫　61草間義道, 玉田輝巳, 辻厚子　63泉澤晴子, 尾崎展男, 中村一郎, 宮正伴　64西川宣征, 広瀬慶子　65秋元敦信, 小林郁夫, 筒井力彦, 宮口たね子　66山本正和　67松波紀子　69岸田邦雄　70太田正昭, 吉山守　71仲由紀子　72宮本俊男, 山下和代　73柏村豊子　75古江輝紀　77安部貞詔, 川島千恵子　78飯田明美　79村田由美　81谷川清澄　82渡辺正実　84阿部秀夫, 飯島勝夫, 梅田実, 波多江則子　85佐野文彦, 高山日出美　86阿部幸生, 大月久朗, 渡部靖宏　88有田二郎　93西部美里　99岡澤美穂子　03瀬尾一　04松村孝弘　以上58名

●4,000円納入者

56鈴木隆子　57福永重弥　59澤地次雄　60豊田亮三　61小山登志江　63鈴木郁子　77山口文恵　82栗原孝　95根本英里　以上9名

●6,000円納入者

56滝戸澄子　57田妻正吉　63今川民子　64清水慶子　72片岡孝子　83誉田治義　95馬渕さおり　99三浦基文　以上8名

●10,000円納入者

56木下禎子, 伏田英雄, 山崎俊子, 吉田幹子　57宮尾清三, 森田允子　58遠藤けい, 河島智, 金光継道, 中村勝義, 中村健　59石橋久子, 牛尾俊江, 笠原雅美, 小林早苗, 佐野三穂, 島峯望彦, 清水英雄, 南部都, 根本乃夫　60今村典子, 湯川祥子　61市川征江, 小沢経子, 後藤立子, 佐藤文子, 清水公乃, 清水紘子, 清水妙子, 富田貞子, 畑岸彌, 藤本康雄　62石川春恵, 高城省三, 安田園子, 山崎美江　63木村昌稔, 国領文子, 清水夫佐子, 千葉貴司, 實松昌汎　64清水紘代, 宮崎光一　65坂田英明, 田中祐子, 長谷川紀子, 山川貴子　66糸井欣三, 遠藤靖子, 佐々木連, 中山凉子, 望月清見　67田代克秀, 星隆志, 増渕美子　69内田康夫, 岡島宏, 町田洋子　70岩瀬義男, 道祖土勝彦, 菅原成子, 相馬紀子　71江口元暁, 藤原良雄　72安藤清子, 大石成子, 小川康子, 河合真知子, 高畑悟, 中村均, 早坂ノリ子, 森川邦子, 渡辺正剛　73大河内一紀, 目文代, 福地幹男, 三浦修, 安川憲　74青木裕子, 小野太郎, 上條明子, 平井幹廣, 山上和夫　75久保田泉, 竹内二三雄, 立川真理子　76青柳貞吉, 青柳雅子, 小野沢隆志, 信田明子, 高田暢子　77井澤郁子, 生沼クミ子, 尾島友子, 小花隆, 富岳令子, 長沢京子, 皆川弓代, 山本由紀子　78川口伸一, 鈴木洋子, 三宅宗晴　79大原直子, 目繁明, 松本明美, 松本道明, 三浦数典, 横山薫　80河井明子, 滝川喜久子, 松本淳二　81小方敏, 小野泰子, 黒川眞哉, 公山由紀夫, 田窪康雄, 松本葉子, 宮下敦, 山崎隆子, 山崎光夫　82加藤直人, 戸﨑孝子, 小松貴美子, 西部拓也, 渡辺道　83倉科佳子, 小林弘子, 造賀裕子, 広瀬真理子, 若宮紀子, 渡辺智子　84梅本貴子, 狩野哲也, 岸田朋子, 近藤温子, 堀美鈴, 森山祐一郎　85小野幸夫, 慶野哲雄, 岡田こずえ, 土志田和正, 中村吉男, 藤森浩行, 保延芳子, 松永みゆき, 箕浦雄二　86林由紀子　87大井雄仁, 月井英喜, 本東由香里　88山崎ひろみ　90大根有司, 城下理恵, 細内和政, 渡部佳子　92齋藤慈子, 高間誠子　93沢田敬子　94平塚真紀　95岡村優花, 土田繭美　01田上幸光　以上162名

●12,000円納入者

63山口透　64岡田幸子　05池野徹, 椎橋美奈子　以上4名

●20,000円納入者

59市原正, 角田吉弘, 松嶋敦子　60島田順子　61山崎恵美子　63加藤富貴江　65内山勲, 真下京子　66越川節子　67小野内常子, 地曳利雄　68川口時彦　70鈴木延子　73藤田敬子　77岡野洋子　78曽根義継, 高橋光枝　79小川敦　81星野良市　82池田明, 信平智雄　83中村則弘　85普久原隆, 八田良重, 三上敦史　89石渡しのぶ　93戸倉美恵子　94安居院雄介　95和喜多知江, 野口周作　04紀伊国早紀　05青木智文, 青木春香, 秋内紀子, 穴田充孝, 天野佳世子, 新井美子, 安藤成紀, 伊尾岳, 池田陽子, 石井達弥, 石渡恵, 井田友美, 市橋明日香, 市原和義, 伊藤匡伸, 植木美沙子, 内田好美, 昜田都, 江口美夏, 遠藤璃帆, 大久保勝史, 太田麻奈美, 大谷俊介, 大塲優美, 大林千恵, 小鹿野綾子, 小澤祐子, 加藤祐一, 金澤良隆, 金子泰明, 河内梨恵, 川上奈緒子, 川野亜津沙, 菅野珠美, 木下智子, 久保田さやか, 小泉敦子, 小島亜紀, 小林里司, 小巻聖子, 齊藤梢, 齊藤裕子, 榊原裕子, 坂野博之, 佐々木孝江, 佐藤和也, 佐藤美沙樹, 四方公亮, 篠﨑真紀子, 島田宏一郎, 清水理絵, 下前博史, 庄司美知香, 末廣和恵, 鈴木薫, 鈴木奈津美, 鈴木望, 鈴木美江, 須藤幸, 須藤智美, 清知世, 妹尾佳代子, 高崎由晃, 髙田耕治, 高野顕子, 高橋日奈子, 髙橋真紀子, 髙桝久美子, 高柳論也, 竹垣信哉, 田邊知己, 谷瑛子, 知花真弓, 寺浦麻未, 寺尾泉美, 寺田朋子, 富沢直行, 富永良美, 長岡裕樹, 長澤恵美, 中村真由美, 名塚典昭, 西前好正, 西村怜子, 根井直子, 根岸彩, 根本愛子, 根本雄太, 野村沙和子, 萩原友和, 林智久, 原幸宏, 原田美菜子, 原田幸賢, 伴野絢子, 菱山和義, 平井浩二, 廣瀬容子, 福村玲子, 藤田彩雅, 藤田佐和子, 伏見真由子, 藤本健太郎, 藤本侑亮, 古川里美, 細野あず沙, 堀込恵可, 町山美里, 松田尚子, 松田佑平, 松永浩司, 松村有希子, 松本明華, 松本絢一, 南抄公子, 村山景子, 毛利篤樹, 茂木嘉, 茂谷康, 望月裕子, 矢澤公美子, 屋代詠子, 柳川彩乃, 山口裕則, 山田貴紀, 湯徳佳美, 渡邊恵美, 渡辺智恵, 渡邊まい　以上160名

●30,000円納入者

77真坂彰　以上1名

●50,000円納入者

78夜久美千　以上1名

●70,000円納入者

78赤津弘美　以上1名

平成16年度本部正会員会費納入者
（薬学部校友会へ会費還付があった者）

56原田貞亮, 吉田幹子　57一ノ瀬衛, 久慈静江, 髙仲正, 森田允子　59椛澤洋三, 山内盛　60奥窪伸之, 斉藤文夫　61前田敏晴　62山崎美江　63武井侑代　64小松康宏　65小林郁夫　68高橋繁治　69坂田秀臣　70宇野澤まり子　74伴野和夫　75鎌田みづ江　76石田制利, 鈴木孝, 本橋重康, 吉田善一　78高野英夫 79川島仁子, 齊藤順子, 地曳いせ子　80梅沢芳史, 田中香代子, 中村正敏　81木下義文, 高柴泰子, 畑伸一　83広瀬真理子　88緒方寛之　90西村伸大　94土屋晃一　96小豆畑穣, 荒川基記 97猪狩富夫　以上41名

平成16年度本部準会員会費納入者
（薬学部校友会へ会費還付があった者）

○平成16年大学院博士前期課程入学者

鈴木慶一　以上1名

○平成15年学部入学者
大塚智之, 川島由樹, 斎藤大, 古谷航, 綿引彩乃
以上5名

○平成16年学部入学者
北村佑, 船岡由貴　以上2名

平成17年度本部準会員会費納入者
（薬学部校友会へ会費還付があった者）

○平成15年大学院博士後期課程入学者
荒川一郎, 和田平, 阪田泰子　以上3名

○平成16年大学院後期博士課程入学者
鈴木郁子, 林充昭　以上2名

○平成17年大学院後期博士課程入学者
樋口孝, 李賀然, 大塚進, 柴田久史, 髙橋努, 中尾進, 谷地豊　以上7名

○平成16年前大学院期博士課程入学者
金澤美鈴, 藤井康博, 加藤直人, 齋藤裕美, 北市裕子, 猪狩千恵, 石井範正, 石村淳, 今井徹, 岩石季里子, 井上元基, 衣斐大祐, 上田千尋, 大﨑隆晴, 大財朋博, 尾田幸子, 大橋一登, 長田暢弘, 小田哲朗, 影山貴史, 神田裕子, 酒井理予, 在間知佳, 島田早織, 菅原悟, 住吉祐介, 鈴木健史, 髙中妙子, 野中敬司, 平田江里, 深澤亜季子, 三輪亜梨紗, 山本美智子　以上33名

○平成17年大学院前期博士課程入学者
天野佳世子, 安藤成紀, 伊尾岳, 池野徹, 石井達弥, 石川貴之, 井出康昭, 伊藤匡伸, 加藤祥子, 佐々木孝江, 四方公亮, 篠﨑真紀子, 鈴木薫, 髙柳論也, 多喜しをり, 田子けいと, 立石正和, 建川一朗, 徳田栄一, 長岡裕樹, 名塚典昭, 西村怜子, 根本雄太, 野伏康仁, 野村沙和子, 萩原友和, 林智久, 伴野絢子, 菱山和義, 福村玲子, 藤本健太郎, 松田尚子, 松田佑平, 茂谷康, 雨宮恵司, 浦野敦, 亀田真, 小林直子, 猿田紀子, 鈴木紗斗美, 関口哲一, 高橋憲二　以上42名

○平成15年学部入学者
相本恒陽, 秋田綾子, 浅野由里子, 阿部圭佑, 荒木佐知子, 有賀史瑛, 阿部展子, 有村知穂, 五十嵐良樹, 石井紗代子, 池田淳, 石井祐子, 石田俊, 石野雄介, 泉田尚津, 市川洋希, 市村理人, 一柳七麻, 今村千乃, 井本亜希子, 岩井了, 岩瀬正史, 岩松年隆, 上野裕晃, 浦野みゆき, 上野山亜純, 栄角佳菜絵, 江口実沙, 尾池智子, 大川枝里子, 大井孝彦, 大川慶, 大澄朋香, 大川原拓佳, 大滝由李, 大沼幸恵, 大野裕介, 大場枝里子, 大平明梨, 大森崇行, 岡澤亜紗美, 大平梓, 岡田博之, 大森裕美, 小川国大, 荻野智之, 沖村沙織, 小川好美, 荻野未来, 小川智弘, 沖山佳奈, 小川菜穂子, 小野友也, 小坂浩子, 小野澤秀高, 皆藤佑一, 加賀美マキ, 角田美穂子, 影山千恵, 影山智恵, 風見明日香, 金井直美, 金生谷直美, 金巻由美子, 加村麻里子, 亀ヶ谷直幸, 金巻裕子, 亀田圭輔, 唐澤小百合, 川上麻美, 川島将太, 河村絵美, 神戸香織, 木下真紀, 岸田真由美, 喜島奈央, 木野まり奈, 木下智弘, 木山智葉, 窪田みなみ, 栗田将旭, 郡司美菜子, 黄木玲佳, 小林慶子, 古賀裕章, 小谷亜矢, 小林妙子, 小段加織, 後藤教嘉, 小林由梨, 小林利典, 齋藤大, 坂井隼人, 佐藤裕之, 酒井侑美, 佐藤雅也, 坂本恵美奈, 佐藤靖久, 佐野裕理, 佐藤麻梨子, 座間美佐子, 澤田希和, 佐藤美沙子, 塩谷明美, 嶋田暁優, 島崎由希, 島田喜進, 清水順子, 下田恵理, 下島香南子, 山中明日子, 下田康代, 諸喜田明利, 白井絵里奈, 鈴木慎一郎, 菅澤えりか, 勝敦史, 鈴木直人, 住吉祐希, 鈴木勇太, 染谷文洋, 高際貴子, 高橋彩, 高田和仁, 高橋里奈, 滝澤麻美, 髙橋央奈, 田口美菜子, 田中絵美, 竹内彩夏, 武田智子, 田中好, 田島裕子, 千阪栄里, 鶴見陽子, 土屋寛典, 常光史佳, 出川雄大, 照井一絵, 堂元典子, 戸叶香織, 徳武丈示, 土橋真理子, 永島貴裕, 中川知子, 中北敏賀, 長島憲政, 中島悠子, 永田温美, 中出千裕, 中島博史, 中村千紘, 西田友紀, 入田明子, 丹羽潔枝, 野秋隆太郎, 野口泰広, 野末尚子, 延原潤, 野村仁志, 野中真衣, 萩野茜, 原田理香, 橋本圭介, 林海菜子, 原田真喜子, 比嘉崇之, 臂千枝, 昼間千明, 廣瀬靖章, 広田正美, 府川優子, 福岡直美, 福島恵太, 藤井千秋, 藤浪由佳, 福嶋友美, 藤野絵理香, 藤野真由美, 淵美奈子, 船渡川里絵, 星野史朗, 細羽由紀子, 前田康多, 益田祥史, 松尾岳, 松田晃, 丸山拓郎, 三浦泉, 三科沙織, 宮岸寛子, 宮本博司, 三宅加奈子, 宮﨑由美子, 宮谷希海, 村田達教, 村林紀雄, 室田紗希, 森明日香, 望月美佐, 森田明子, 森元裕太, 森田肇, 矢島一子, 物澤由佳, 矢作忠弘, 山裕美, 山岸由佳, 山下笑美理, 山口聡, 山本拓真, 山本名緒, 横江翼, 横尾桂子, 吉岡裕太, 吉田香織, 吉原健, 吉牟田絵理, 吉村俊太朗, 吉田怜, 若井暁, 和久美幸, 和田政孝, 渡邉博昭, 渡辺裕治, 渡部智之　以上226名

○平成16年学部入学者
相川誉人, 麻布百合子, 福島彩子, 吾妻隼斗, 安藤光司, 厚見恵, 安東理大, 飯島慎弥, 飯田康太郎, 飯干祐美, 五十嵐文, 池田直美, 伊澤一貴, 池田善彦, 石川恵美里, 石田祐介, 井田貴之, 市原光, 伊藤友紀, 糸数陽介, 稲場佑生子, 井上倫代, 今井由恵, 岩野由貴, 植木大介, 上原麻衣子, 上村苑子, 内久根暖佳, 梅原美紀, 江口義朗, 江藤翔一, 榎亜季, 鶯塚弘奈, 大石竜也, 大澤亮平, 大塚泰吉郎, 大野郁美, 大室綾, 大山幸恵, 小笠原隼一, 岡直樹, 小笠原実智代, 岡田淳吾, 小川明男, 奥田早紀子, 小口紗祐梨, 奥貫高明, 小沼美佳, 小野春果, 折井啓一郎, 加藤裕規子, 甲斐岳史, 片山頌子, 加藤優美子, 金井理恵, 加藤涼太, 狩野裕子, 神谷あゆみ, 上和野浩一, 川口貴美乃, 川島慶子, 菅野匠, 神田愛美, 菊島僚, 北村祐, 熊山ともみ, 熊倉康徳, 栗原恵里奈, 栗田充, 桒原尚子, 栗原成典, 監物見紗, 河野成香, 国分佳, 小柴聡子, 兒玉知明, 小林幸枝, 小松由枝, 齋藤綾乃, 逆井麻衣, 齋藤恵美, 佐藤暢祐, 櫻井仁美, 指田ミカ, 佐藤明子, 澤田浩一, 佐藤摩耶, 佐野真由美, 澤田貴史, 佐藤優, 真田佳美, 三瓶由香, 篠原喜英, 志田良美, 柴崎宏介, 下川展代, 下舞由香理, 清水健司, 東海林美菜, 新谷菜々子, 須藤章子, 鈴木展宏, 末田みさと, 鈴木祐介, 須藤博之, 鈴木香織, 須永洋, 鈴木富仁, 薛寿栄, 千賀新太, 高崎伸一郎, 髙田麻美, 高橋慶, 高山有那, 髙橋佑輔, 田中登子, 髙橋惇一, 高梨友佑, 田中まい子, 髙野美紀, 田中有称恵, 高橋優香, 田中融, 田甫静花, 竹内亜美, 多田純平, 髙萩紀子, 千葉聖, 土本祐輔, 恒川祐介, 津野俊也, 角田智, 寺崎祐美子, 寺下薫, 照屋陽子, 冨樫美穂, 徳宿桂子, 野老直樹, 友政真弓, 富田景子, 富永杏美, 豊田綾, 内藤泰寛, 永井萌子, 仲川真由, 長井達弘, 中嶋章人, 中田理奈, 長島隆文, 中込未来, 中島隆良, 中野英明, 中平裕基, 中嶋亮介, 永鳥由里子, 中橋良介, 中村和寛, 南雲昭人, 中村雄一, 中島美咲, 奈良克彦, 中村貴之, 西﨑景子, 西川泰史, 西澤君子, 西村有樹, 能勢裕久, 野原良介, 信田愛, 野間礼, 野村英一郎, 萩原裕未, 橋口友貴, 橋本侑子, 長谷川雅紀, 秦美奈子, 八田加奈子, 服部結美, 初野美智, 花澤知子, 濱野由宜子, 林彰子, 一杉俊輔, 東田真依, 樋口直美, 久重侑子, 平沢孝幸, 平田明日香, 平山友香梨, 深澤美南, 福本朝弘, 福田恵, 藤田裕子, 藤村祐樹, 藤田由実, 船岡由貴, 星野剛史, 堀江東平, 細川麻衣, 堀江知未, 堀川耕平, 本多正孟, 牧理絵, 牧野友香, 松田藍, 牧重彬, 松田萌香, 三上泰輝, 溝口正博, 箕輪仁美, 三原春佳, 宮川元範, 村上由季, 村田真紀, 森重克哉, 森田真澄, 森山雄太, 森田陽介, 矢倉尚幸, 矢島潤一, 柳瀬舞, 矢野間朗子, 八巻月子, 山岸良多, 山口諒, 山崎由美子, 山田茂幸, 大和由佳, 山本香織, 由井達也, 吉田智恵, 吉川翔, 吉田后里, 横山大輔, 吉田泰史, 吉森好弘, 渡辺百合香, 渡邊謙, 柏木真由子, 亀入ひろみ, 杉原織衣　以上241名

○平成17年学部入学者
合葉俊介, 青木理恵, 赤沼雄介, 赤羽真子, 秋山綾乃, 浅香侑加子, 浅沼すみれ, 浅野裕子, 東太郎, 穴倉龍彦, 安部麻奈美, 雨宮芙美奈, 阿部真太郎, 有馬佳奈, 飯田侑, 飯沼亜季, 五十嵐由美, 池永朋代, 石川奏, 石飛真理, 石丸雄基, 石渡裕紀, 市橋裕也, 伊藤直人, 井戸川いぶき, 伊藤宏俊, 稲泉佑香里, 伊藤蓉子, 今井鉄也, 岩井里江, 岩田真理子, 岩渕恵理子, 上田敬太郎, 海本智也, 上田沙矢桂, 梅澤昌弘, 浦野高弘, 江川怜那, 遠藤直哉, 大久保歩, 大塚貴大, 大西里佳, 大橋千夏, 岡真衣子, 岡田秀平, 大橋麻美, 岡田麻里, 小川智弘, 奥野明世, 小川洋平, 小倉純一, 尾関大輝, 小倉理加, 小関沙希, 尾上豪, 小野田千明, 小畑新太郎, 折井香澄, 織原由美子, 樫村泰葉, 柏木基希, 勝俣知香, 加藤由貴江, 金久保明子, 金森隆, 金子真由美, 加納まりえ, 鎌滝真永, 神木俊昭, 川口亮, 川崎祐介, 河村俊介, 菊川麻理, 菊地翔一, 木口美幸, 木村真也, 菊池悠, 北村理恵, 木村愛, 久住真維, 倉田秀人, 栗原康広, 黒川芳晴, 黒澤衣華, 桒沢泰人, 源後泰史, 後藤宏和, 小嶋佳奈, 後藤裕司, 小早川博信, 小林礼乃, 小松和也, 小林優理子, 古村和圭子, 小柳美帆, 小林裕侑, 小山智代, 小柳友香利, 小山由美子, 近藤沙織, 斉藤瑛子, 三枝芳, 齊藤加奈, 櫻田理華, 佐々木洋明, 佐藤未織, 佐々木彩, 佐藤泉, 佐々木絢子, 佐藤裕之, 猿倉康平, 佐藤恵美, 佐々木香奈, 佐藤蘭, 塩野入洋, 柴田彩子, 島田惇司, 柴田邦彦, 島田杏子, 清水美春, 嶋田紘也, 七五三亮太, 白井諒, 須賀貴之, 菅野真由美, 菅谷ひろみ, 杉山貴博, 鈴木晶子, 杉山奈央子, 鈴木恵理子, 須﨑勇介, 鈴木麻衣子, 清古裕子, 蘓武高行, 高井崇浩, 高木千佳, 高崎佳美, 田頭武明, 高田美奈子, 高堂沙織, 高梨信之, 髙野裕美, 高橋翔真, 髙野裕加里, 田口貴博, 武田紗由里, 多田昌弘, 田中千尋, 田邉こずえ, 谷口祐子, 田村洋介, 千田朱希子, 辻本安里, 津田有梨香, 坪倉嘉誉, 寺澤未希, 寺島大智, 徳永真希, 戸田諒, 利根川翔, 富澤優三, 富田由貴恵, 鳥山淳司, 中川彬, 中嶋康雄, 中込朋子, 中野隼治, 中島祐, 長瀬浩一, 仲野陽彦, 中島望, 中野博喜, 中林秀彰, 中野美友希, 仲間太郎, 長嶺充, 中村公薫, 南戸裕, 西岡明男, 西林洋, 西山直孝, 野沢進吾, 灰塚一貴, 箱﨑歩美, 長谷川ゆかり, 鼻田圭吾, 花岡あつ美, 花田夕香, 林田翔太, 原由香理, 原口奈菜, 原田真臣, 春木鷹志, 東弘幸, 疋田舞, 久田健登, 檜田勇貴, 日髙由加里, 人見成俊, 兵藤大介, 平尾優果, 平山祐介, 福井佐紀子, 福村知隆, 藤井健太, 藤田幸奈, 藤森将弘, 古屋徳親, 細田瑛梨, 堀内保宏, 本澤里沙, 本田香織, 牧野裕一, 松浦佳之, 松尾拓, 松田明日香, 松橋龍也, 松村綾子, 真室綾子, 酒造友美, 三科俊恵, 水田隆代, 宮内智也, 宮川綾, 三宅浩平, 宮﨑悠, 宮前政幸, 村上奈緒子, 村瀬絵里, 村山悠, 村瀬貴弘, 森久美子, 茂泉渚, 森直紀, 馬上雅光, 森学, 本里麻理子, 森美和子, 安井千紘, 山口あゆみ, 藪崎憲人, 山口弥里, 山下彩子, 山岡由佳, 山下徳一郎, 山口大輔, 山﨑令奈, 山下雅人, 山田紘史, 山下裕美子, 山根潤也, 山本隼, 山内佳織, 山本直樹, 横田佳代子, 吉田周平, 横溝理絵, 吉田稔, 横田康男, 吉井一矢, 吉田史子, 吉野恭平, 吉村和昭, 米田裕子, 渡邉裕之, 若菜彩子, 渡鍋恭裕, 脇いずみ, 渡邊亮真, 足立満里子, 伊藤百加, 小野紳矢, 加藤雅子, 髙木彰子, 山本典子　以上275名

会報封筒宛名欄会員番号に☆印のついている方は本年度会費が未納の印です。会費納入をお願い致します。

会費は年額2,000円です。
事務簡素化のため5年分10,000円又は10年分20,000円を一括納入して頂ければ幸甚です。

発行日　平成17年10月15日
編集人　日本大学薬学部校友会事業委員会
発行人　日本大学薬学部校友会　山内　盛
印刷所　協友印刷㈱
TEL 03－3267－8056

発行所　千葉県船橋市習志野台7－7－1
日本大学薬学部内（〒274-8555）
電話・FAX 047－465－1478（直通）
振替口座番号　00140－0－53798
振替口座名　日本大学薬学部校友会